

增補雅言集覽

四十九

813.6

I 619g

Wm

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

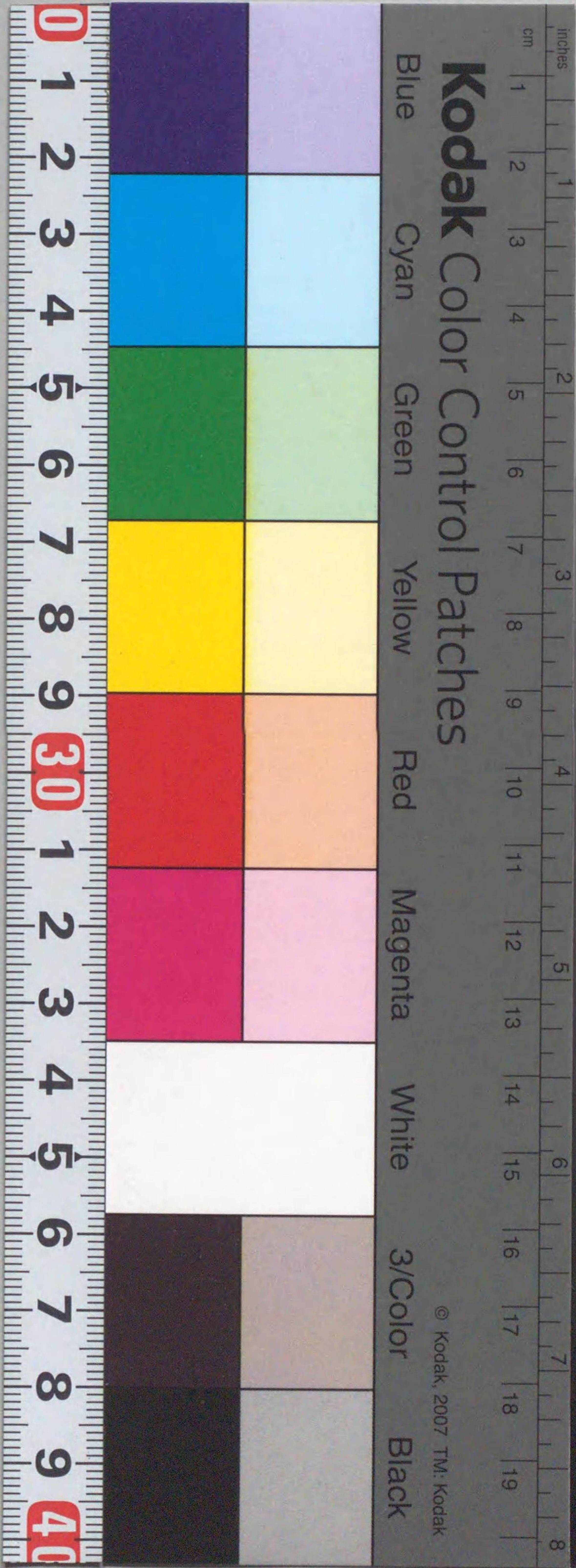


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



81316
I619g
NND



691365

増補雅言集覽卷之四十九

石川雅望集
中島廣足補

○女の部

め目 (和泉式部續集) 上「いをいねばよのよも物いおもたまうちをへさむるめこそつらけれ(同)同」かか／＼まかぐさめかねつから衣うへしてきるよめのとさめつゝ(和泉式部物語)物おもふ人のよるとてもうちとけてめのおふか(源空蟬)五目すこしそれさることちして(神代紀)上、洗左眼云々洗右眼(源玉葛)卅るかりびたる目ともいましてめづらしきまでかんおもひける(同若紫)廿さたすぎたる御目さもよめもあやよこのましうみゆ(同蓬生)九みからいせなりよれる目よても狐かどの變化よやと覺ゆれど(同玉葛)廿とへたる目よふとよもこりぬなりけり(枕)十ふるものい雪あられみぞれい云々又いとおほういふらぬが瓦のめとよ入りてくろう眞白よ見えたるいとをり(同)十一日ぐらゝ見るよ目もたゆくくるちう云々(源柳)廿七戚夫人の見けんめのやうよこそあらせども

め(古) 戀五よみ「うさめのみおひてなぐる、浦なればかりよのみこそあまのよる人しらす

らめ(伊勢物)百四「世をうこのあまとい人をみるからよめくせよとせよとのま
 る哉(源野分)五めづらしくうれしきめをみつるりかとおぞめ(枕)十二かゝるめ見
 んといおもひかけんやとあそれがる(狭)四十七中いりできりとも神佛世はおせせ
 さるめの見せ給えんとねんせられ給ひて(源夕かほ)卅なよの契りよりゝるめをみ
 るらん(同夕霧)九かゝる世の人のこゝろなれば是よりまさるめをもみせつべか
 りけりと云々(後)戀二源「こひいさねぬよかぐさむともかきよあやしくあそぬ
 目をもとるりな(新千)戀二「おとよきくるとのうらよかづきをるあまよこびしき
 めを見するりか(源すま)九四十かゝるめいそぎもあるりか(枕)十八よくきものゝあ
 しきめみるも罪のうらんと思ひながらうれし(補好忠集)「秋風のふくき衣をとき
 みたりさほすほどよぞ寒さめをとる

どち目ぬひ目たぐひ目けち目ゆひ目_{ガナノ所}あそ目(後)後_{二よみ}「玉たれ

のあそめのまよりふく風の寒くいそへていれんおもひを君が目(万)十七「かりな
 かよあなばやすけむ君が目を見せひさならすべかりるべし

め妻(源玉葛)廿御方も受領のめよて品さたまりておとよまさんよといへば(同)
 甘。めのだおとよの君のめでよくおとよまともさるやんこどあき御めどもおと
 七。ノ詞

いまおかり(枕)十八朱買臣がめををへねん年よいもと書てやりたりを(大
 鏡)五 其中將の御女の定經ぬいのみめよてこそいおとせめれ(狭)四上。父君おの
 れをこそおぞすてめよて又かくおぞまざるゝ方なくからひ給へる御心よ見
 給えおかり給ひなば片時がらへ給ふべしとや見給ふ(源末つむ)三母の筑前守の
 めよて下りよける(同すま)四十やんこどあき御めどもいとおほくもち給ふてその
 あまりよあなびとみりとの御めをさへあやまち給ひて(同わかな)下八みかどの
 御めをもあやまち(同東屋)二十万の事たらひてめやまあそんのめをなんさためさ
 なるばや(古)別「から衣たつ日云々左注 此哥のある人つかさを給りてあたら
 さめよつきて年へてをみける人をきて、云々(後)三難さためさるめも侍らせひとり
 ぶしをのますと女ともたちのもとよりたされて侍ければ
 めいやく(源帚木)四十やり水のめいやくとかいこまりよろこぶ(空穂初秋)八十か
 へりてめいやくありとむかよりきこいめいかけて(同樓の上)下四そのをりの大
 臣どもの此國のためのかぎりかきめいやくとひろめんといひ出よてし事を云々
 (源花の宴)十まいてさりゆく春よ立出させ給へらまいかば世のめいやくよや侍ら
 まいと聞え給ふ(同若紫)五なよのめいやくよてり又都よもかへらんといひて

めいぞくなく(源 竹川)二卅ひとりをのこどがめらるゝめいぞくなくかん(同 夕霧)
卅かくまでおぼろけならせ出さちて壇をちてかへりいらん事のめいぞくなく佛
もつらくおぼえ給ふべき事を心をおこしていのり申給ふ

○補めいぞくあり(源 少女)十源ノおりのこひ給を見る御師の心ちうれしくめい
ぞくありと思へり(同 蜻蛉)卅京よなど迎へ給てん後めいぞくありておぼらせん
とおもひけるぞよ

めいをそり命終(うつほ 祭の使)卅つものゝため命をひり兄弟こととくこのこ
るかさねなくろびそてゝ
めいごう 明王(源 花の宴)九めい王の御世をなん見侍りぬれど(空穂 藏開)中ノ十四。將
詞さていぬしぞうづもれ給せん中將めい王の御世は出くま下さことゞもなり

補めいぶ 名簿(宇治拾)十一今よりいひとへは御弟子ばかりて候さんといひてふと
ころより名簿ひさいでゝとらせけり(著聞)五花園左大臣家よとめて参りたり
ける侍の名簿のそりがきよ能のふの歌よみと書さりけり
めいそらよ(枕)一ノ御硯のそすれとおほせらるゝめをそらよのみよて(同)十
八とあるをのこたて文を目をそらよてとりたるこそをかへけれ

めをな 目鼻(源 楨柱)十さるこまかあるそひのめをなよも入ておぼれて物もおぼ
えを(同 行幸)四いできえごものかこあるよやあらんおぼれめをなともみえを口
をしくぞおされたるや目鼻一所よ(宇治拾)九ノ年わかき目をな一所にとりよ
せたるやうよて世の人よも似ぬありけり

めをかつ 目放(源 螢)廿をべて女子といふものかんいかよもノめをかつまどかり
ける(狭)四ノ上まいて時のまも御目もなたせ給ふべくもおぼれめされ御ひさの
上よて日ぐら守りきこえさせ給ふほど(枕)一ノたゞおそさまをのを見た
てまつればとほきめめをかつつべ

○目をなごせ (宇治拾)四希有のわざかなと目をなごせ見るぞよ云々
めよとまる(源 末摘)廿あかたことみゆるもの御をなかりけりふとめぞとまる
(同 帚木)卅その折よつきなく目よもとまらぬなををいもからせよみいでたる云々
めよちかき(源 蓬生)五例の女もらいうんせんをそのよの常の事とてとりまぎ
らいつつ目よちかきけふあすの見ぐるさをつくろもんとするときもあること
を云(同 あふひ)三四十つねがき世の云々 目よちかく見むべりつるよいとそよきこと
おなく(同 帚木)十六目よちかき人のいへるありさま(拾)雜ちかとなりある所よ云々

會補雅言集覽 卷之四十九 三

「秋萩のちた葉よつけて目よちかくよそある人のこゝろをぞみる

めよかけ(狹)三中、云々を母とやの御目よかけていとゆゝくうゝろめたくおぼさるれば

補めよかけさけて(金葉)戀下 小大進 「かくさかり戀のやまひのおもれれどめよかけさけてあそぬ君かな

増めよつ(玉葉)戀三 隆房 「つくづくととるよこゝろにくれもとりあやしと人のめよ

やたつらん(同)雜一和 泉式部 「つれづれと物おもひをれば春日のめよたつもののかさみ成けり

めよつく(元真集)三 嗟峨野の前裁なる云々 同一野よて人よいひかく「めよつくりそくなかりけりをみなへあまとおぼかるさげのかれども

○めよつかぬ(源 帚木)二 えんよこのまよきこといめよつりぬ所あるよ(同 わかな)下、九院いいとめよつかぬ見給ふ事どもあれど

めよさそり(空穂 初秋)五十 「そこあるやとるよかくるゝ海もといえこそかづりねめよさひりつゝ

めよみぬ(古)戀一 貫之 「世中のかくこそありけれ吹風の目よみぬ人もこひよかりけり

めよみえぬ(古)序めよみえぬ鬼神をもあそれとおもせ(源 わらな)下、九をくせあといふらん物の目よとえぬとさよて

めよみす(うつ布 國讓)中ノ 大将打笑きて(詞 藤壺)おとさう目よみすゝ人の親よならせ給ひて云々(源 あふひ)二 めよみすゝ世よのかゝる事こそありけれ

めど(源 蓬生)十 むつかしき物とおぼしやるらめとひたふるよ人わろけよよももてさよきこえとさど(古)春下よみ 八しらす 「春とよ花のさうりのありあめとあひみん事

いいのちかりけり(右京大夫家集)おのづからのこりて跡とふ人のさよがあるらめと(枕)十九 我おもふことをかきやりつればあしこ迄もゆきつりざるらめと心ゆく

こゝちこそそれ(源 柏木)廿 人かまよのおぼしれざりけめといとけかう侍りし時よりふかくこのみ申心の侍りしを(古)春上 色も香もおおとむかよさくらめと年

ふる人ぞあらたまりたる(同)戀四よみ 八しらす 「ちよのいろようつろふらめとちらあくよ心よ秋のもみちあらねば(同)戀一よと川のよとむと人のみるらめと流てふりき心

あるものを

めとむ(源 空蟬)四 もやの中柱よそはめる人やとが心かくるとまづめとどめ給へば(同)五 心あらんと目とむめつべきさまたり

めとまる(源夕か)一十あやうらうさげよめとまるべきふしくとへなどして(同)
をどめ(四)むか御めとまり給ひしをどめのすがたを

めども(古)名物一花の木よあらざらめどもさきよけりふりよこのみなる時もがな
目ともさめて(空穂 藏開)上ノ一上下ひとたびよと笑ふ人の御めどもさめてい

と興ありとおもほま
めち(續古)雜下伊勢よ下りて侍りける比「とへがく玉くしのそにみがくれても
顯季卿のもとに遣しける俊頼

せの草くさめちならせとも(夫)廿(和泉式部集)下秋夜いたくくもりたるよ「か
むれどめちよも霧のたちぬれば心やりがる月をたよ見せ○眼路よてめさきをいふ
よや

めちかゝらぬ(枕)二七日の雪まのこりを青やりよつと出つゝれいとさよもさるも
のめちかゝらぬところよもてさわぎ云々

めり(下)ツクテコナハ也云々(源夕顔)一四十これもよよえあるまトきかめり(同)
ヤウスヂヤ云々トニユル

る(四)此ねたがぬさきよかならせあひみんとたのめ給ふめり云々よよきよかど
いおろかならせ覺をかめりくいとよくぞおもふうれしきよもげよけふをかぎり
よこのかぎさをわかるゝこそなとあそれがりて口くゝはたれいひあへること

もあめり(同)一四十けよいまひとへ志のそれ給ふべき事をそふるかたみかめり(同)
六十かへるをみよつけて御ふまつかそをひきりくしてこまやのよかきこまふめり

(同)四十この比のさやうの御ふるまひさらよつゝみ給ふめり(千載)雜上「らぎり
おきよさせもが露をいのちよてあそれこと一の秋もいぬめり(古)秋下よみ「たつ
と川もみちとたれてかがるめりわたらばよよき中やたえかん○メリハベシといふ
心よて推量よも云ひ又ナリと云心よもいふ也此二首のナリの意かり(後拾)雜五
「みやまよいたれをり君の思ひいづるとやこの人の君をこふめり(源わのき)上ノ
花みたりがそしくちるめりや(同)横柱(三)夜もふけぬめりやとそゝのり給ふ(後)

秋中「とがやどのよその秋萩ちりぬめりのちみん人やくやよとおもそん(同)雜一
宗干「うとどのみまどるの中成ぬめりをかがらあらぬ影のみゆれば(後拾)神祇「さ
かき葉よふるしら雪もきえぬめり神のこゝろも今やとくらん(枕)四九此をろのこ
どことのかかめり(同)四「まどひいづるもあめり(大和物)四「花をよき君がたよ
ぞなひくめるおももぬ山の風ふれども(同)同「ふたりこゝ道ともみえぬ浪の上
をおもひかけでもかへせめる哉(新古)羈旅太上天皇「見るまよ山風あらくとぐるめ
り都も今やよさむなるらむ(枕)三一をのゝえもくちぬべきかめり(古)物名「なみ
伊勢

の花おきからさきてちりくめり水の春とハ風やなるらん(後) 雜四「いせとたる川
 ハ袖よりながるればとふよとされぬ身ハうきぬめり(同) 同「あそり川淵瀬よか
 る心とハみをかこしもの人もいふめり(重之集)「今朝とればあまのをおねもかよ
 ふめりおそつうとハこちらざるらん(千載) 戀五和「ねをあげハ袖ハくちてもう
 せぬめりおそつうとハこちらざるらん(拾玉) 二「せよきかな加茂の川原ハ河風
 よとのけみされでさぎたてるめり(金葉) 詞石疊ハかれて侍めりと申をきよてよめ
 る(宇治拾) 廿七「そやく狐見返ハてまへよそりゆくよくまらるめりといふよ
 ○廣足云此詞の意味あゆハ抄よくそく解たり鈴屋翁もやうと云意よとかれた
 り又改觀抄鈴屋翁書入ハめりハありハ同トといされたり(古) 立田川もみぢみた
 れてながるめり云遠鏡云立田川ハ紅葉ガ散ミダレテ今最中流レルヤウスニ思ハレ
 ルソレデハ今ワタツタナラバアツタラ錦ガマン中カラキレルデアラウカイ○打聽
 ニ云流るめりハあがれりを延ていふ詞あり
 めりき(源若菜) 上八尼ぎとそそのそまであがらへ給ハなんとの給ふめりき
 めぬき目貫 (拾) 神樂歌「あろがねのめぬきの太刀をさけよきてからのみやこをね
 るハたがこそ

める(源ゆり紫) 十それよつけてもの思ハのもよそハかんよそハの末よおもひ給
 へなけき待めると聞え給ふ(同 早蕨) 三中納言殿のからをたよとめて見奉るもの
 からまハバと朝夕ハ戀きこえ給ふめるハ同トくハみえ奉り給ふ御ちくせからさ
 りけんよと見奉る人々ハ口をハがる(同) 五そでもハがるさりりハかりてかハト
 しくぞあハハハ聞え給ふめる(古) 雜下ふるの「ありよけん聞てもいとへ世中
 ハなとのさよぎハ風ぞハくめる(源 帚木)「こがらハハふきあそめる笛の音を引
 とむむべきことのもかハ(伊勢物) 百廿「うぐひすの花をぬふてふかさもがぬ
 るめる人よきせてかへさん○新釋云ぬるめるハぬるハやうすと云意あり古意の説
 ハハガことなり(拾 雜戀小野宮 太政大臣)「人ハれぬ人まら顔に見ゆめるハたがよのめたる
 こよハなるらん(枕) 三三位二位のうへのきぬをむるをりさりりぞ葉をたよ人の見
 るめる(千載) 雜上道「何事もかそりゆくめるよの中ハむかハながらのそハ柱か
 後(春上行 明親王)「ふる郷の野べ見よゆくといふめるをいさもろともよわりなつてん
 清正集「ちハやふる神ハいのりハあふことハ草をよつけてけふぞ見ゆめる(蜻
 蛉日記) 上「あらハのそふくめるやよよそをよさほはいでたりとかハやかりらん
 玉葉雜一重之女「鶯のまたものうけよなくめるハ今朝もこそあハ雪やふるらん(金

葉

戀下よみ
人しらす

一とかるめることのよきのみおほけれどそらかけきをばこるよやあ

るらん

(拾)春
人丸

「あそからのわかたつまむと片岡のあいたの原のふぞやくめる

(大和物)

四。アシカ
リノ段

かくそかなくていまそりめるをみきて、云々

べか(湖)

めるめれど

(源花の宴)初つき頭中將人のめうつしもとからせ覺ゆめるめれど

めをまつりよさし出さりり

(源東や)五人の調度といふ限りの只とりあつめてあら

べすゑつ、目をまつかよさし出るさりり

めをどきて

(空穂 歳開)
上ノ土器とりて

出給ふ兵部卿の宮あなめづらしやいみたく

もこぶかくもこもられたりづるりかどて目をどきて皆守り給ふ更よかんかき御門

の聳なる源中納言なむらひたりといひりりど

めをたて

(源 蜻蛉)
廿。浮舟ナク

御ふをやき失ひ給ひしそよなどてめをたてむ

べらざりけんなど夜ひとよかたらひ聞えありせ

めをたて

(源 螢)
十わりやりなる

殿上人などめをたてつ、けしさをむ

めをそめ

(源 桐つは)
三。うへ人あどもあひなく

めをそめつ、(孟)正体よむか

ぬ心なり(河)長恨歌傳京師長吏爲是側目

(源 若菜)

下、六此院にめをそめ奉らん

こといとおそろしくおぼくおぼゆ

めをまつけて

(源 空蟬)
五目を一つとつけ給へれば

おのづからをばめよみゆ(同 若菜)

上ノ

衛門督いといたくおもひりめりてや、もそれば花の木よめをつけておがめ

やる

めをくさり

(枕)十三。僧ノ

目をくさりつ、讀るるこそ罪うらんと覺ゆれ

めをくせ

(落くる)

二こゝろえておぼるさうしきどもよめをくはそればそりりよ

りて(蜻蛉日記)

中、こゝちのあきれ

てあれり人かよてあれり人めをくせつ、い

とよくゑきてまかりたるべし(宇治拾)二ノかりむらちりけよといひつるをまひ

よめをくせけれ

(枕)四十八

「かつきをるあまのそかひそこかりとゆめいふな

とやめをくせけん

(源 わかな)

上ノ中務中將の君かどやうの人々めをくせつ

つあまりなる御おもひやりかか、といふべし(大鏡)三大將の御方をあまよ、び見

やらせ給ふよめをくせ申給へば(著聞)十六、五安忠あめをくせけれ

補 めをこやせ

(更科日記)

下一時がめをこやしてあよ、かひせん

補 めをきそむ

(好忠集)

「あかねささいそとの山もええぬべく目をきそめてもてれ

る夏かな

めをこあそす

(源 夕うほ)

六御こゝろをかやましければ人よめもこあそせたまひせ

(同 見の奇) 十八 おふけあきものよこゝろおかれ奉りていかでかめをもみあせせ
たてまつらん

補 目をいむたゝき (紫日記) その人よめとゞまるめをいどめつれば

目をいむたゝき (宇治拾) 十二。イケナガヲ雉子ノ鳥の目よりちのなみたをたれて

めを忘れたゝきてたれかれよあせせれるをみて云々

補 目をさます (著聞) 十六、人々目をさましたるよ (同) 十六、ふしぎの事かなどめを
すまして見るたる所よ (同) 十八、羣臣興に入て目をさましてけるとぞ

めかい (空穂 藏開) 中ノ。大將 かしこよの人もせらせたゞ仲忠らが母一人めかい

たる女よて宿もりよいと聞え給ふ 上詞 そのめかいとらん一所こそいさそやかなら

んあまたよりいともづかろうん

めかど (檜垣姫集) てづから水くむきまよかりて桶をひきさけていづるよしも國の

守神拜にいせらるゝ道よさしあひたればめりどあるものみつけてあとかくい見と

むるよ

めぐる (伊勢物) 四十よの中の人このろいめぐるればわすれぬべきものよこそあ

めれといへりればよきてやる「めぐるともおもせなくよとせらるゝとさしな

ければおもかけよとつ (源すま) 十のくてふるそとたよ御めかれせとおもふを (同
あふひ) 四十、まことよいかなりともとのどかよおもひ給へつるそいおのづから

御目ぐるゝ折もそべりつらんを

補 めかる蛙 (夫) 五、光俊 「つとめすとねもせでよるを明す身よめかるかそづのこゝ

ろをきとぞ (拾葉) 云めかるの蛙のよくなる物なるが目をさまして鳴をいふとぞ

めかゝう (大鏡) 五、又たかなのかを男のおよひことよいれてめかゝうてちを

をおとせば云々

めかゞやく (源 鈴虫) 三、そゝをみ給ふ人々めかゞやくまどひ給ふ (同 早蕨) 十見も

忘らぬさまよ目もかゞやくこゝちする殿つくりの

めがれせぬ (六帖) 一、(伊勢物) 八十一、おもへとも身をいどけねばめがれせぬ雪のつ

もるぞわが心ある (六帖) 六、(古) 貫之 「くるどあくどめがれぬものを梅の花いつの

人まようつろひよけん (頼政集) 六、廿「うつしうゑてこの一もといめがれせト菊もぬ

しゆゑ色まさりけり (續古) 秋上、前太 「ながきよいつの人まよ更ぬらんめがれ

ぬ月ぞよよかりゆく (後拾) 秋下、伊勢大輔 「めもかれせみつゝくらさん白菊の花よりの

ちの花よなけれバ

めぐれき(源 句宮) 四 十みやのおそしきさん世のかぎり朝夕御めかれき御らんせ
られ見奉らんをたよとおもひの給へバ

めぐね 妻うね (空穗 くて宮) 二 廿まををつたおれ身よありともおのがめがねを人よ
ほらせしめてありなんや

めりも カハ 心 (古) 序 いまへをあふぎて今をこひざらめりも

めどち (枕) 十ノ よれ人の御事さらなりけをなどのほども親をどのりなうる
子めたちみたてられていたさうこそ覺ゆれ

めたしく (發心集) 六 そのけしきよのつねあらめたしくさよどまえければ

めたつ (源 紅葉賀) 十 人めどつまつくあたらかよもてさまふ物から(新古) 序 こ
れみか人のめたつべきいろもかく心とむべきふもありがたき故云々

めたう (源 旗柱) 廿 宮の女御のおそしければめたうをかりのへたてある(同 桐壺)

五 えさらぬめたうのをさしこめ(和名) 十 弁色立成云馬道俗音米 多字 向堂之道也(枕)
十 不そどの、やり戸いと、うおあけされバ御ゆどの、めたうよりおりてくる殿

上人の (大鏡) 御湯殿の馬道の戸口 上

めさて (源 浮舟) 六 句中君へ宇 治より文を ことらうく、トきふもみえねど覺えあきを

御めたて、このたて文をみ給へバ 云々

めれば (源 早藤) 十 御まへちりき紅梅のいろもりもかつりきようぐひをたよ見ま
ぐいがたけよ打あきてこたるめればましてさるやむりとのこゝろをまどそ給

ふどちの御物語 (後) 戀 二 中務 「いたづらしたび、いぬといふめればあふよ何
をかへむとそらん(拾) 人 戀 二 中務 「うもれ木の中むいむといふめればくめちのそ
いの心してゆけ

め染 (源 鈴虫) 初 花づくゑのおそひををかきさめぞめもかつりうきよらあ
るよ不ひそめつけられたるこゝろをへめかれぬさまをり

めづる (允恭紀) 八 さかぐさ櫻の梅メデコト 涅許等梅メデコト 涅麼波メデコト 椰區波メデコト 梅メデコト 涅孺メデコト 豆メデコト 留メデコト 古メデコト 羅メデコト

(源 紅梅) 十 「まなのりをよほすやどよとめゆりばいらよめづとや人のとがめん
めづら (六帖) 下 「ふいてぬる床めづらかるきみなれば今もあへること、ちこそを

れ(源 兼澄集) 一 ふるさとのことやつたふるすと、ぎを初ねからねどとこめづらな
る(夫) 十八 「諸人のむれても庭またつの日、豊のありりぞいやめづらかる(紫日

記) 廿 年もそたよきやそよかりもてまかるいさうこれより老ぞれてそめづらと
そ 云々

めづらり(源夕顔)九おもかけよみえてふときえうせぬ云云いとめづらかよむくつ
なれど(いせ物)十四そこなる女京の人めづらかよおぞえけんせちよおもへ
る心あんありぬる(源あかし)六このおまゝ所のいとめづらかかるもかたづけなく
て(同ゆふ顔)二まづいとめづらりある事よも侍るりかかねてれいからせ御こゝち
のものせさせ給ふことや侍りつらん(同總角)七あらまゝとよてたよつらよとお
もへるをまいていりよめづらりよおげうとまんどいとこゝろぐるよきよ(同桐
壺)三めづらりなるちでの御かたちあり

めづら(神功紀)三希見此云梅豆邏志履中紀六歡其希有神代紀下有一希客
者

めづらうきみ(源植柱)十火トリチイカ心さグひとひながら猶めづら
うみおらぬ人の御有さまかりやとつまそ下きせられうとまゝうなりて(同帚木)卅
これよりめづらうきことの候をんやとてをりぬ(万)卅二もち月のいやめづらうみ
おもぞえう

めづらうけ(源少女)三さしそかれきらららうめづらうけあるあたりよ今めり
うもてなさるゝことをりけ(拾)忠見イ忠岑「春くればまづぞ打みるいそのり

とめづらうけかき山田かれども補貫之集「み山よの時もさためを百千鳥めづら
けなくかきこさるるな

めづらう人(源蓬生)七かのとのよめづらう人まいとゞものささけりき御ありさ
まよて(空穂國讓)中二をなまぢめづらう人をもまづとこそ同水の大

めつけよ目ヲツケヨ也(源浮舟)五十供よあるわらひを此をのこよさりけなくめつ
左衛門さるもの大輔の家よ入とみせければ

補めつぶれ(宇治拾)七見るまよ大よをたてめつぶれたる女人りな
めあれ(小大君集)十五云々ちらでちとせをすぐさまうりバとぞありける殿上人の
つけらるゝをしむあまりめやなれおまう櫻をな云々うつ下七いさや常よ

せらるゝ事かれバめなれて何事のきよらをりせん(源紅葉賀)十帯これのよ
めなれぬさまなればなんとておひてさよ奉る

めなれたる見ヤナイ見(源末摘)二かびきこえおもておかれたるのをさよある
ま下きぞいとめかれたるや(同帚木)初さもあたまめきめかれさるうちつけのまき

まきうさなどのこのまうからぬ御本姓よ(同桐壺)六とよ比つねのあつさよな
り給へれば御めかれておぞえさう心みよとのこの給のさるよ

補めかれ木(顯季集)一浪かくるさゝのひたひのめかれ木のめかれて妹とぬるよ

しもがか(拾玉集)六「つみいらばむくひをおもへもかたさめからぶ人のひとり

ならぬを(續後拾)戀三二條院「いりよせんつらき心の花がたみめからぶ人よりつるち

ぎりを(六帖)下五「もかたさめならぶ人のあまたあればさすられぬらむかきから

ぬ身の(夫)卅三「いせトまやあまのささよそくあそこのめからぶ人もかきぞこひ

き(同)九知家「むそびおくあをつらこのりほ瓜のさぞかめからぶたぐひのみして

補(新後)冬隆祐「霜がれの籬のきくの花がたみめからぶ色もえぬころりか

めから(目訓)狭二上かくつねまの給ふありさま少しけちかくて見せ給へ云々答

いであなうたてまたさよめからし聞え給えんこそあぢきかう侍らめ(源幻)五あ

りしよりけよめからし人々の今んとて行われんぞとこそ云々

めら(盛衰)八いふことをきりぎの第八外海の小龍めら四大河水の八大龍王し仰付

てかくかすべしとぞ唄ける(同)履をとるまでもなき小龍めらかり(同)小龍かどの

ものゝりきとも存せせされば龍王めらとも申侍るなり

めら(沙石集)二上八かをかきよしつる錢のりたち此めらうが顔のぞよあたりて

とえけりあさましをいそんさりかくてめらうをよびてくるよいさゝりも疵か

めら(竹取)七さの申ともそややきて見給へといへそ火の中よりちくべてやき

たり(給ふに)いめらしとやけしりバ〇べらし(同)

めん(狭)二上五よろこびかこまりてこそ侍れこれよすぎたる面目候べき

やうか(同)四上三あふしりへさましてかきりりの身の何りをし侍らん此世の

めん(く)よこそいなごらりよたのふれ聞ゆるを(項羽本記)縦江東父兄憐而云

我我何面目見之

めん(源)蓬生四廿我御ためめん(く)かければさたり給ふことか(同)竹川

二廿さるづきもさゝでひとりをのどがめらるゝの面目かくかん(うつ)櫻の上(下)七

いざや心などのおもふやうよよくもあらせの御さめよめん(く)なくこそ(盛)

衰九身し取て一この大事めん(く)をうしあふべし

補めん(く)ある(枕)四十一かきかりめん(く)ある事をりきとて

めんどり(平家物)十四十一楯をめん(く)りばよつきからべ源氏こゝをかけよやとぞま

ねきける

めんどう(榮 晚待星)一 承香殿のめんどうより通りてのぞらせ給ふ(長門平家)四 主上をば時忠卿いたき奉て雪の御所のめんどうは立給ふ

補めんく(著聞)十六ノ侍五人ぐせられたりめんくはきらめきたる中云々面々よきらめきて

めうつり(狹)三下万よ口をいさめうつりのいとゞいさかめりか(源 帚木)五今めりいさよめうつりてをりいさもあり(榮 ゆして)七と一比り川のたりのあり

さま御めうつり先おぞし出らるべし
めうつらぬ(源 紅葉賀)五ことくよめうつらぬ(同 わり紫)廿さぐひかくゆい

さ御ありさまよぞかよともめうつるまどかりれる(同 のわき)四めうつるべくもあらぬ

めうつり(源 楨柱)九をまひかどのあやうをどけかくものよきよらもかくやつて云々玉をみがけるめうつりよ心もとまらね(同 蓬生)廿御めうつりこよかりら

ぬよ(狹)二ノ下心ふりくをみよ一方の源氏なめからぬめうつりよこれかからもあさましくなさけかき心をみえ奉りて(源 花の宴)初つぎよ頭の中將人のめ

うつりよさむからせおぞゆべりめれど

めのいとま(源 わかな)上七かおふみ見給へるいのいとまいりて念佛もけたいをるやうよやくかうてなん

めのと(源道濟集)源中將の家のさくらいとおもいろくさきたりよをまてめのものもとよやり(源 夕かほ)卅めのとよて侍るもの此五月のころほひよりおもくこづ

らひ侍り(同 桐つは)十をさき女房御めのとなどをつりそつ(補 後拾)釋教「さうなくもおもひけるりなちもかくてはうせの家れめのとせんとい

めのと(源 蓬生)七侍従といひ御めのとこのみこそとてころあくがれいでぬものよて

めのとら(源 あかし)廿入道めのとらいのときかう侍よりおもふ心をべりて(同 東や)十常陸いとらうたしとおもふめのとらひ侍り(同)三なまがいのめれこ

らひのさめよ自ラノ娘ヲサシテ云補(榮 初花)九いへくのめれとらひをいまのよれこといしてのものぐるをういくへともあらぬまでさせたる

めのなら(狹)三中らうさけようつくかり御色さまをたよ猶室の八いまよ

たちならび給えざらんとせちよおとしめおもひやり聞え給ひ御めのならひよこどわりぞろいと先うち思ひ出られさせ給ふいとこびうて

めのおうな 妻 媪 (竹取) 上めのおうかよあづけて養かひを (舊本今昔) 卅妻の媪よ云

補 めのこと (伊勢物) 八 十 つとめてその家のめのこといせうきみるの浪よよせ

られさるひろひて家の内よもてきぬ○高尙云めのこの女の子あり日本書紀よ婦

人又ハ女人のもトをめのことよみさりたゞ一空穂物語吹上の卷よふねどもよめの

こともおりたちてそめくさあらへり、又これのうちもの、所、こたち五十人をり

めのことも三十人をりりあるをみるよ中昔の比ハ下さまの女をいへるやうなり

こゝなるも家よめしつらふ女せいへり

補 めのこふ (榮 月の宴) 卅うへよりそとめたてまつりてかんたちべたちこひさこ

えめのこひ給ふ

めのとぎりふたがを (狭) 四 十六 下つくしへ下り給ひける事とのありさまハ目のみぎ

りふさがりてそりくくさ御らんトやらせ

めおそろく (源 釋標) 七めづらく御めおどろく事のおきほど (源 紅葉賀) 六人のめ

をもおどろりし心をもよろこませ給ふ

めおや 女親 (枕) 三 十一 おやつりあき物、十二年の山をのりの法師のめおや (源あふ

ひ) 卅 九めおやあき子をおきたらんこゝちして (同 釋標) 廿まことよろちこのむ

べき親などよてみゆづる人たよめ親よをかれぬるいとあそれなる事よこそ侍る

めれ (落窪) 一め親のおいせぬよ幸なき身とりていくでいなんとおもふ心ふり

(枕) 十 十一 ことよ人よ忘れぬる物、ひとのめおやの老たる **補** (落窪) 一此たちをさ

がめおやハ左大將ときこえける御むすこ左近右の少將よておとしけるをかんやい

ひ奉りける (兼澄集) めおやよおくれそべりてほとゝぎを聞侍りて云々 (大和物)

四こりれときよめおやハうせ給ひよけり○北邊隨筆ニ云め親といふ事ふるくハみ

えぬ名なりいよへハおやとたよいへハ母よかぎれるをめおやといふハ古義

をうしあへるなりをべてかゝる事どもその比よりいと多し用捨してとるべき事な

り蜻蛉日記よめおやと見ゆ

めおし志ぢり (源 夕霧) 廿めおし志ぢりてあやしきとりのあどのやうよかき給ふ

めく (源 桐つほ) 七からめいたるよそひうるさうこそありけめ (同 夕顔) 三花の

ない人めきて (同 若紫) 十その國よりいれたるよこのからめいたるを (同 末摘) 十

うくしうかどめきたる心ハかきあめり (同 紅葉賀) 十そりなくみ給ひけん人をも

のめりし給ひて人やとがめんどろくし給ふあめり (同 葵) 十御もの、けめ死てい

くわづらひ給へバ (同 蓬生) 廿あまそゝぎもあは秋のいづれめきて打そゝけバ (同

總角) 五十 九月十日の夜さかれバ云々 時雨めきてかたくら(同 玉葛)卅山がつめ

きておひ出たれば(同 橋姫)卅山さどめいたるくまあとよおのづら侍るべりめり

(同 早縁) 五 よるよなりてまけしうふさいづる風のけしきまた冬めきていとさむけ

一補(拾玉) 一 「そともなるならの木かけまかくろひてまたき秋めくゆふ月夜りな

めくそを(空穂 藏開)中ノみすのもとよ後の宮おのせバ上ノ大將よ御目くさせてみ

そりよよませ給ふ(伊勢物)百四 一世をうみのあまと一人ををるからよめくさせよ

ともたのまるゝりな(源夕顔) 一十つ死しろひめくのを(項羽本紀)須臾梁眊藉(師古曰

使之補(源竹川)廿おいらりよめしよせてめくもせたてまつらましりバ(文選) 屈原

也 云滿堂美人忽獨與余目成

目口とたりる(落窪) 三北の方 目も口もたかりぬ(宇治拾) 十二公卿殿上人僧さち

おれをさくよあさましく目くちをたかりておぞゆ

めぐり(源葵) 廿ひとりふし給ふよとのる此人々ちりうめぐりてさふらへと(同

蓬生) 五くづれがちなるめぐりの垣(同 神) 五十帳のめぐりよも人々をけくかゝる

たれば(うつろ 藏開) 上 此めぐりよすまをなりよけんいかであるぞととせ給へ

バ(同) 五くらのめぐりををらひきよめさせて(源幻) 八木のめぐりよ木丁をさて、

かたびらとあけきの風もえふまよらとと(同 わか) 下 五御丁のめぐりよ人おほく

さふらひておまゝのはとりよさるべき人必さふらひ給へバ(等由氣宮儀式帳) 玉垣

々廻板垣廻防往籬 皇太神宮儀(空穂 藏開) 上 一 そのめぐりよかく世よさきえ給ふき

みそと給とてま家つくりて(同 祭の使) 卅めぐりよふまともやまのこどくつみて

(更科日記) 上 かぞそしたる所のめぐりあともなくてりりそめのかやゝの藪をとも

か(枕) 十一 されどめぐりよおきて 炭ナ 中ノ火をあらせたるのよ(續古) 羈旅

「なすをさし見てこそゆかめ高師山ふもとよめぐる浦の松原 爲氏

めぐり(源夕霧) 卅まためぐり参るともかひや侍るべき(空穂 嵯峨院) 七十四

面めぐりたち馬車もをさしとえき(神代紀) 上 陽神左旋陰神右旋(清正集) 「里

めぐりなごきさかりぬるとぎは人の心をそらまかいつゝ(源手習) 十一「これかく

てうさよの中よめぐるとも誰りのあらん月の都よ(万) 十七 「をまかへし咲たる野

べをゆきめぐり君をおもひてともとりきぬ(神代紀) 下 三 周流(源 楨柱) 卅 踏哥

春宮の御りたよよめぐるるとよ夜あけぬ めぐりくる(千載) 雜上法 「ありなく

よ又も此世よめぐりこばおもがそりよを山のもれ月(源松風) 廿 「めぐりきて手よ

どるさくりさやけきやあさちのよまればあそとみし月

○めぐりあふ(伊勢物)(拾)上雜「こぼるをよるさの雲井まなりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで」

○めぐり水のとよのありり(顯宗紀)二年春三月上己幸ミツノニメグリミツノトヨノアカリシタマフ後苑曲水宴

○めぐる(源 蓬生)八惟光いりてめぐる(源 兼光)人の音するりたやととるよいさゝり人けもせせめぐらひめぐらひめぐらひカナ順ニイダス

補めぐり(海人藻芥)御菜をばめぐりと云常ニオマハリト云ハワロシ

めぐる(源 夕かほ)三めぐれまほひてあさましうかあしとおせせバ(榮衣の珠)九そらづの君御目もくれてえ見奉り給へ(源 兼光)五十ひたおもてよい

りぞりあらひし給へん目もくる(源 兼光)こゝちすれば此たゝむぐみをとりておんせんへ

こたり給ひぬ(源 兼光)落く(源 兼光)一めぐる(源 兼光)こゝちすれば此たゝむぐみをとりておんせんへ

めぐるめぐ(つれ)百十めぐるめき枝あやふきほどいおのれがおそれ侍れば申

させ(宇治拾)六さらし見ゆべきやうもあしめぐるめきりなしければ(云々)

めぐそ(落く)二ねふたかりければめぐそとちあひたり

めぐら(宇治拾)十一ひとつ橋まめぐらぐこたりあひけるをこの惠印あなあふまの

目くらやといひたりけるをめぐらとりもあへ(云々)

めぐら(源 葵)六物見俄まめぐらしおせ給ふて見給ふ(同 松風)十たうのかざり佛の御具をめぐらしおせらる

めぐら(空穂 藏開)下六をべて三十人のものどもこそ(云々)さりとものゝ

召しハ参りなんそれハ皆めぐらしおみをつくりてつらささん(同)下七こゝままと

ころべんのきみめぐらしおみつくりてさへともめしあつ(云々)少將よりのりさへ

のめぐらしおみあるりせて奉る

めぐらひ(源 玉葛)九これハ監あしくせられてこの近き世界ハめぐらひ侍りつれど(同 権の本)廿かう

でいりりぞりかざりあらん御命もあましめぐらひ給さんと(補)遍昭集かゝる山の

そゑよこもりてしなむをまち侍りまたかんあやしくめぐらひ侍り生めぐらふ(源

紅梅)九けぢりき人のおくれ奉りていきめぐらふおせろけの命がさからとり

しどこをおせ侍れおと

補めぐらひ(風雅)冬「をどめこが雲の通路ふくりせよめぐらま雪ぞ袖よみど

るゝ

補めぐむ(拾員)上「めぐむぬと見ればくれし春の草風よおそろく秋のきよけ

り(拾玉)五 「あきまつと聞そめしよりしもがれて春もめぐまぬ谷のかげぐさ(玉

葉)冬兼 「木の葉をかきむなしき枝よとしくれて又めぐむべき春を近づく(風雅)春

公 「春雨よめぐむ柳のあさこどりかつ見るうちも色ぞひゆく(同)同兼 「春のい

ろをもよほそ雨のふるかへは枯野の草も下めぐむあり(同)同兼 「めぐむよりけい

きことなる花なればかねても枝のかつりさかか

めぐむ(源玉葛)七 且君をまましてめぐみ給ひてんとて(万)十七 「道のなりくま

つみ神の旅行もあいらぬ君をめぐみたまもあ(古)序ひろきおほんめぐみのかけつ

くを山の麓よりもあけくおそしまして(大鏡)神ほどけのめぐみりうむれるよた

り

めぐむ(万)九 けふのえいめぐむもな見を事もどがむな(同)十七 ころぐ

めぐむもなしよとけやしとがおくつま(同)十九 「人もあくふりよしさとよある

人をめぐむや君がこひまかせむ(同)十八 父母を見ればたふとく妻子見ればかか

くめぐむ

めぐむ(目癖付)空穂 嵯峨の院 九十 ひさしくまどらひも侍らぬよそこを

くの帝の御まへよいりでりさふらそんをがうちよささの院のいりよめぐむせつ

たる御門ぞの云々(宇治拾)十三 此石とりてん後よ目癖あるものもぞ見つ

るとおもひて

めぐむ(此詞スベテ)古 戀五よみ 「こめやどの思ふものからひぐらゝのあくゆふぐれ

いたちまされつ(同)戀四 「おもひ出てこひし時ハ初鴈のあきてわたると人あ

るらめや(同)人しらす 「くれなるのまつをぞめの色ふりく思ひし心これわをれ

めや(同)戀四 一里人の言ハ夏野のあけくともかれゆく君よあはざらめや(源初音)

五引わりれ年のふれども鶯のそたちし松のねをわをれめや

めぐむ(ミグルシクモナキ也)源竹川 卅 九かゝらでのとやりよめやすくてよををぐれ

人もおやりめりり(空穂)廿九 右大將殿のそりりぞかたち心めやすくまうの

りりなどもあそくせらるめる(同)初秋 廿八 あてこそいあやしくこゝろしことおも

くおあべて目やそくこそ物し給へかど聞え給(落窪)三 越前守よ此事をりりハ我

思ふやうよてせよとてあて給ひければいとめやすくしり(源桐つは)九 心をせの

かたらりよめやすくよくみかたかりしことなど(同)十 とりくつくろひよとてめやす

さほどよてすぐ給ひつるを(同)夕顔 十六 いとめやすくあづめ給ひて人のとがめ聞

ゆべきふるまひハ給そざりつるを(同)東や 十四 あまよかゝる事いふ人々の中よ此

君の人がらもめやまらあり(同)同いやーからせめやすきはどの人のかくねんぞろ
よの給ふめるを(同)七いりよもくふた心ありらん人のそこをめやまらきたのも
き事よのあらめ(同)さわらひ八めやすきわざやと見奉るものから(同)す雲十御
心おきてよもてたがふことかくいとめやすくぞありける(補)枕三下女のきま
云々 年老てもの例おさしりておもなさまさるもいとつきくうめやま
(源すま)廿七かつのめやはくもてかくつるぞりーと(同)藤のうらと十ことうちあ
ひめやまき御あまひとおさる(山家)上「みさびるぬ池の面のきよければやどれ
る月もめやまかりけり

めまうけ(榮さま)廿御母麗景殿の女御の御せうと源中納言重光と聞ゆるが御
聳まなり給ぬ御めまうけのほど兄君よこよなるまさり給ひぬめり

めまきくるひ(空穂 嵯峨の院)七宮とてめまきくるひをこそ給へいとよくけよ
いおとせせ

めまどろぎ(源 東や)四十何こちとおおがえをべらせまいとくるく侍ると聞
え給へバ少將右近めまどろぎをしてかたをらいたくぞおすらんといふもたを
るよりのいとほし

めぶさちぢやう 馬部(盛衰)廿五いりさまよも廷尉下され馬部吉祥まらせて禁
獄流罪よもやと恐れくおのさる給ひたりけり(同)廿六。彈正少弼仲國小督を

る所 召ぐさる馬部吉祥を二三人とゞめ置彼家を守護させ我身の内裏へ馳参り云
お(貞觀儀式)十 飛驒儀左右馬寮官人將馬部一人亦被鞍馬候於閣外云々

めこ(うつほ 藏開)下四天女下り給ふらんよまやわがめこいでこん天の下よわが
めこよまべき人かーとかん思へりける是の事なり(日本紀竟宴)使まつり

いされてめこもろともよまかりーよ(空穂 初秋)八十 其人の御めことてさるおほざ
うの中よ出さしりてあるよことよまづりーからせ(源あらし)四かかききめこのか

ほをもとてまぬべきことよなけく(万)五 妻子どもいあとのべまかこみゐて(同)八
廿めここればかなしくめぐ(源 葵)六 遠き國々よりめこを引ぐつまうでくか

るを

補めて 右手(宇治拾)十五。弓いろかたぬぎてめてうしろ見まそして

めで 愛(源 桐壺)廿 あそれなるくをつくり給へるを限りかうめで奉りて(同)竹川 六

わりき人々の心ことよめであへり(土佐日記)上云々といひてありければいといた
くめで、ゆく人のよめりける哥云々

○補めでのさりり 愛盛 (万)五神ががらめでのさりり天下まをさまひ云々

(類聚國史)御意乃愛盛爾 (文德實錄)三御意乃愛盛爾

めでたく ケツカウナ (空穂 藏開) 下ノ行政仲忠例よりいじめめでたくさえさぎ

て心づりひいて出来り (同) 同 四此少將此世の中よめでたき物いそれけり穴ある

物いふきをおる物いひさよろづの舞敷をつくして (古) 春下よみ 一のこりかくちる

ぞめでたき櫻花ありて世中よてのうければ (源 帚木) 四十女身のありさまを思ふよ

いとつきなくまゆきこゝちしてめでたき御もてかゝもなまともおぞえ申 (伊勢

物) 六かさちのめでたくおそければ (枕) 十一火桶ひきよせたる火の大きよて

つゆくろみたる所なくめでたきをこまりある灰の中よりおこいであるこそい

トウ嬉しけれ (句題和歌) 風月部 不明不暗 一照もせせ曇りもてぬ春のよの朧月夜

ぞめでたかりける (同) 遊覽 一白雲の中を分つ夕暮のめでたき事ハ山よぞ有ける

(源 若紫) 廿このわり君をさか心ちよめでたき人うかとみ給ひて (同 桐壺) 九さまり

たちのめでたかりこと (補) (拾玉) 一池水よめでたくさけるさちすりなこともお

ろりよ心かくらんめでたけれ (枕) 三桐の花云々いみどうこそいめでたけれ

めでくつがへる 感覆也 (源 竹川) 十 カサレ 打たれたれ給ふ名残さへとまりたるか

うばいさど人々のめでくつがへる (大和物) 一良少將太刀のをよまべき皮をもどめ

ければ云々哥云々とまべりければ監命婦めでくつがへりてもどめてやりけり

めでまどひ (伊勢物) 百七かのあるトある人あんをり死てやりけりめでまどひよ

めでゆさる (源をとめ) 廿もろこよももてことりつたへまほしけある世の文ども

かりとなん其頃世よめでゆさりける

めでーれて (空穂 俊蔭) 七十仲忠めでーれて大將のかづけ給へるあこめを打かづさ

てもろともよまひあそび

めあふ 目合 (源 あかし) 八またやみえ給ふとことさらよねいり給へと更よ御目もあ

そで (同 帚木) 四十一みー夢をあふよありやとかけくまよ目さへあそで頃もへよ

ける (同 神) 四十ひとり打ふ給ひて御目もあひせ (山家) 下一幻のゆめをうつよ

みる人いめもあひせや夜をありせらん

めざとよ (枕) 八 うつく ふたつ みつ さり ある 兒の いそ ぎて まひ くる 道 い とち ひ さ き

塵などのありなるを目ざとよとつけて

めさる (古) 維 寛平の御時よもろこよのさう官よめされて侍りける時よ云々

めざまし 心のうごき目のさむる程の事をいふ (源明石) 卅まご給をぬかたちを

いとよし アキレルイカバシイシンクワイナ 卅あて宮かゝる人のかへりこといせぬ物をたゞ見せつれ

うおぞさる (空穂 藤原君) 卅あて宮かゝる人のかへりこといせぬ物をたゞ見せつれ

バめざまし とかんいふとをの給へ(落窪) 二北方 詞 いらへなせをめざましと制せられ

て(源 帚木) 卅さる方のこゝろもかくていめざましとあるトからん(同) 五人は似ぬ

心さまの猶さえ立のやりけるもねたくかゝるよつけてこそ心もとまれどかつい

おぞし おぞし 卅さる方のこゝろもかくていめざましとあるトからん(同) 五人は似ぬ

んも人わろりるべくまめやりよめざましとおぞしありつゝ(同 寄生) 七十またこ

とめてぬよいをぎりへり給へるをおぞしどの御方よいどありぢめざましうと

のたまふ(同 紅葉賀) 卅まこゝもおろりあるをさめざましとおもひきこえ給へるを

(同 夕顔) 七さらば其宮づりへ人かゝりたたり顔よものあれていへるりかどめさま

しかるべきさまとやあらんとおぞせど(同 玉葛) 卅女どもの心よまりせてとむつか

るをめざましとさくほどよ(同) 四十ありの御方よおもひやりけたりきをうへい

めざましとみ給ふ(同 わかき) 卅下 尼君のおまへよもせんかうのをしきよ青よびのお

もて織てさうト物をまゐるとためざましと世のすぐせりかとおのりトゝいゑりう

とちけり(同 夕かほ) 卅うちとけさらぬもてかゝ髪のおさけりさめざましとくもと見給

ふ玉葛四十五以下 (同 若菜) 卅上 九めざましき物よかとおぞしゆるさゞらんよかうま

はめたる心也 卅四 で御覽ト志るべきよもあらぬをかたそらいたさまでかきまへの給をそれバ(同) 上

七院よも目ざましといおぞしのためと聞しを(抄) 女三ヲ柏木ニ玉ハラン

ヲアルマシキヲ程ニハ朱雀ノ思召ザリシト也(同 少女) 卅世中うらめしけれバ哀も

まこゝさむるこゝちてめざまし(同 東屋) 卅上 五 上をたぐひかく見奉るよけおとる

とも見えおてよをりし是よおぞしつさをめざましけあることいありなんかい

(瀨松) 二こゝこそとろれれと目たつ所なくをめしうをべてかをりかつりしけかり

思ひの外よめざましうもありけるりなど云々(源 夕顔) 七めざましとおもひて隨身

の参りぬ(同 藤のうらと) 卅あつかうの給ひて物語などし給ふ此も打とけぬるこ

トめをめり物をどうちいひたるけしひなそうべこそいとめざましう見給ふ(同 若

紫) 卅「あゝこの浦よみるめのかたくともこのたちながら歸るかゝりめさま

しからんとの給へを(同 桐壺) 初御方々めざましきものよおとしめをねみ給ふ宣長

詞卷々ニ數シラズ多カルヲ思ヒワタシテ考ニサハ云此 (同 紅葉賀) 卅かうやうよとゞめ

アルマシキヲ思ヒタイキトホレル意ノ詞ナリ

られ給ふ折々なごもおぞしるをおのづからりきく人おぞしどのよ聞えければ誰

からんいとめさまゝ事よもある哉(同 さまあき)七十ことさらよかるめろうせらるるよこそいとおぼしやすよいとゞいとどうめさまゝく此ついでよさるべき事どもかまへ出んよよきたよりかりとおぼしめくらんべ(同 少女)二十人々のいひけいさをめさまゝうねたしとおぼす御心うさきてすこしをいさうあざやぎたる御心よのちづめがたく(同 榎柱)廿打たえておどづれもせむしをかかりにことづけがほなるを宮よのいとどうめさまゝがりおけき給ふ(發心集)四たれをりりり我体の物うつしとるよさをせん此事めさまゝきものよ〇按(明石)十けおもすきたるりなどめさまゝく見給ふ(盛衰)七かやうよさりえ給へばこえられ給ふ方さまの人の目醒しく思ひ嘲りてトアリ此文字アタレリ目ノサムル計ノ心ナリ(紅葉賀)よかへりての事さまゝよありけんトアルさまゝノ語ヲ思フベシ(源 若菜)卅上ノえりあき御ささびことをたよめさまゝきものよおぼして心やそからぬ御心さまあれバ云いりある心をおき奉るべきよりめさまゝくかくていあどどがめらるまどく心やすくても侍なんを(同 夕きり)廿けさやりなるけいさよもあらでめさまゝけまこちよがやよ(瀆松)二めさまゝうおほけなき事をりりり

めさまゝ草(新續古)俳諧 俊頼 「おひいけるねむりのもりの下よこそめさまゝ草のうよ

べりりけれ(補 藏玉集)「山里の曉でどの松風やめさまゝ草のたねとなるらん(万)廿二 一ありとよきのめさまゝ草とこれをたよ見つゝいましてわれとぬさせ(異名分類抄) 志のゝめ 「さらぬたよ波のおとする須磨の浦よめさまゝくさの山あらふく

めさまゝ(源 帯木)十君も目さまゝ給ふ(同 總角)三十いとゞいさ水の音よめさめて(同 帯木)卅八いたづらぶしとおぼさるゝ御目さめて(同 夕かほ)十隣の家々あやいさちづのをれ聲々めさまゝして(同 少女)廿女君も目をさまゝして(同 わか菜)上九たりがいのさきことのをささめがよめさめてかどくいさぞり

めさゝ(神樂)朝倉あさ倉やをめの湊よあびさをれバ玉のめさゝよあひき逢にけり(古)大歌所 「こよろぎのいそたちからしいそをつむめさゝぬらさを沖よをれなみ(催馬樂)二段 竹花ぞのよわれをばそかてこれをばそかてやめさゝたぐへて〇眞淵云枕草紙よ兒のめさゝかるトモイヒテ未額髪ノミシカクテ目ザスホドナルナイヘリソレヨリ後ワラハト成テモ同シコイフナラン(袖中抄)めのらべあり(夫)廿五よすら一さの國のなぐさの瀆よ貝ひろふあまのめさゝのおとかなりせば

めさゝなる御ぐ(狹)三上めさゝかる御ぐをせちにかきやりつゝ

補目きたな一(散木) 萩「さき初るもぎたちかくせ女郎花をのゝをせゝさめもぞ

きたなき〇顯註云懐胎の女をバ目きたな一といひて染色をせぬかり見れば色の

かへるかりこれ世間不思議事其一也名のゝをせゝさといひまた不いせぬをゝさ

を云也ほよいせやらぬをゝさをバせらむといふかりさればさきをむる萩の色もぞ

かへるとををなへゝいひさかざるなり女郎花をバ女よせてよむゆゑなり

めぎみ 女君(狹)一、下まこと、此隣の駿河のめぎみこそ物の情ありていそんこと

さくんといひくひいひよやらん

めゆひのかたびら(平家物)十、重ヒラ年のよそひ廿をかりなる女房の色ゝろくきよ

けよて髪のかゝり誠ようつくゝき目ゆひのかたびら染つけのゆまきして湯殿

の戸おゝあけて参りたり

めゝく 女々シク(落窪)一藏人の少將よりもまさりていときよけおれば云々かく

計をひゐてめゝくもろともよせるのせろけの心ざゝのあらト(源蜻蛉)十。

心必しもカチいりでり心えん只めゝく心よとさとやみゆらんとおせももづり

一(源寄生)八十かくめゝくねぢけてまねびをそいとそいけれ

めゝ拾(拾)上。清慎公月林寺よまかりけるよかく「むりゝをりゝ桂のかひも

なゝ月のもやゝのめゝよいらねバ(宇治拾)十二よべといへを人きてめゝありとい

へバ(源桐つは)廿おとゞまあり給ふべきめゝあれば(同若紫)初めゝつかのゝさる

におもゝまゝして(同)四十参りくべきを内よりめゝあればをかん

めゝいる、(源竹川)卅侍従もけちかうめゝいるれば

補めゝいたを(清輔集)臨時祭よ四位陪従といふ事よめゝいたされて賀茂よまゐ

りてよとて人のもとへつりのゝける

めゝもち 其人計ヲ放チテコ(源玉葛)卅かくさゝをめて後めゝもちつゝさら

バりの人此こたりよわたい奉らん〇源ノ右近ヲ人ノシラヌヤウニサシノケテカタ

ラヒ玉フナリ(同紅梅)一此さみめゝもちてかたらひ給へを人々のちかくもまゐ

らせまゐりでちりなごしてゝめやりにかりぬれば〇殿上人ノ多カル中ヨリ此若君ヲ

ヒトリメス也

めゝとゞめ(源少女)十つり殿のろよめゝとゞめてことよ物をと給ひせけり

めゝとりて(源繪合)八をぐれたる上手どもをめゝとりて云々又あきさまなる繪を

もをよなきかともよかきあつめさせ給ふ

めゝよと(源末摘)五百ゝきよ行りふ人のきくをりやのどてめゝよするも(同帚

木)四十 此子をももてかゝづきゐてありく君めいよせて(同) 四四十参りされ
六) 六めいよせてありさまとひ給ふ(同) 寄生七十をくりき葛りおとたゞならぬの給ひ
てめいよせてと給ふ 源若菜 上十八 さやりよもおもむけたてまつりてめいよせ
らむ時

めいつりひ(延喜式) 十式部 上凡太政大臣召使者取散位年卅九已下有容儀者(同)
八) 凡大射者預點召使四人擬執旗(源) 末摘三) いたういろこのめるわり人よてありけ
るを君もめいつりひなど給ふ(同) 玉高廿殿もおまへちりくめいつりひせ給へを
(延喜式) 三内藏寮 喚使二人(源) 浮舟十一例よりあつりうめいつりひて(蜻蛉
日記) 上一) なけきつ、獨ぬるよのあくるまのいりよひさしき物とかいりる云々
へりをあくるまでもこゝろみんとしつれどとみなるめいつりひのさあひたりつれ
ばなんいどことわりありつる

めいろう(空穗 俊蔭) 五十院の御門の女三の宮をそとめ奉りてさるべき御
子たち上達部の御女おそくのめいろうとまであつめさふらひせ給ひければ(同) 菊の
宴) 八 此たびのかぐらすこしよろしうせバやめいろうとなさえらびて其行事心とめ
てもめせられよ(大和物) 四守のめいろうとまでありたるをこのめのせうとの在次ぎ

みい志のびてそむよかんありける(蜻蛉日記) 中 小野のみやのおとゞの御めいろうと
どもありこれらをぞおもひかくらん(源) 榎柱十) 御めいろうとたちてつりうまつりか
れたるもくのさと中將のおもとなといふ人々と(孟) テカケモノ、ヤウナル人ナ
り(同) 胡蝶六) 十かよひ給ふ所あまた聞えめいろうとどりよくけかるかのりたる人ども
かんかおあまた聞ゆる(榮) さま五) 廿大のと一頃やもめよておそいませバ御め
いろうとの内侍のすけのおせえと一月よをへてたゞ權の北の方よて(空穗 俊蔭) 五十
おほくのめいろうとまであつめさふらとせ給ふ

めいまつと(源) 竹川八) 廿あけくれおまへよめいまつとつ、(同) 桐つは卅) 源氏の
きみの上のつねよめいまつとせバ心やそくさとそもえ給とせ

めいこめ 体ノ語 (源) 紅梅二十) 今夜のどのなめりやげてこかたよもとめいこめつれ
バ東宮よもえまるら(著聞) 九 弓矢とる身のかゝるめよあひてめいこめよあづり
る恥よてあら(宇治拾) 十一 十一さうりよめいこめよと仰くたされて廿日あまり候ひ
けるをよとよ此したいをきこめいしてわらひせおそいましてぞめいこめいゆりてけ
るとり(古事談) 六 伶人助元依府役懈怠事被召籠左遷府下倉(清輔集) 二 條院の御時
殿上の番りきたりとしておそい廿日あまりよめいこめられよなり 補 (宇治拾) 三 廿さ

やつさしりよめしこめて勘當せよ

めしあつめ(拾)上雜廉義公後院すみ侍りける時哥よみ侍りける人々召あつめて水

上秋月といふ題をよませ侍りける左大將濟時

補めしあけらる(伊勢物)廿九段むり東宮の女御の御うたの花の賀よめしあたら

れさりける近衛つりさかりける人

補めしひ(玉葉)釋致高上八「めしひたる龜の浮木よあふかれやたましくえたる法の

そし舟

めしもの(宇治拾)七十四やりでまんひきたゝなぞしきて水遠かなれとこうせさ

せ給ひさればめしものこゝよてまるらむべきなりとて夫ともやりかどしてとづ

くませ食物し出たれば

補めし姪又姉字鏡姉與女又和名二釋名云兄弟之女爲姪云々和名後拾四義

忠朝臣物いひける女のめひなる女よ又をみうつり侍けるをさしてつりさしける

めもてる(和泉式部集)下いづもへいく人よ「めもてるよかくむら雲へたつとも

おしそかりよの思ひおこせよ補古上雜(伊勢物)四十一一段「紫のいろこき時のめもてる

よ野ある草木ぞとりれさりける(土佐日記)松原めもてるよなり

めもかやく(源繪合)三今めりしうをりしけよめもかやくまで見ゆ(狹)四十一上

もみぢがさねのうへまくれかるのうちさるが色もつやもなべてあらせざる計を

るよ云々めもかやくをりみゆる

めもたゝり(宇治拾)十一めもたゝりせよくみてさふらふぞかといふ(同)卅四二

梢をめもたゝりせありらめもせせして一時をりおさるよ

めもたゝれ(竹取)下この事をなげくよ髪もしく腰もかゝまりめもさゝれよけり

翁ことしの五十をりなりけれよものおもひよの片時よかん老よなりよけりと

みゆ

めもたゝせ(源海雲)十あはくれのけぢめしあければあながちよめもたゝざりき

狹(一)上源氏ノ宮卅一イヒヨル所いとちりくしもさふらぬ人いつもけぢかき御なりらひ

よめもたゝぬからんりし(枕)十六人のりほまとりわきてよとよゆる所たびこ

とよみれよあなをりしめづらしとこそおせゆれよなとあまさびとればめも

さゝせりし

めもたゆく(枕)十九大行道導師参り回向志をまぢて舞かどをる日ぐらしとるよ

めもたゆくしるしう

めもうつらく(土佐日記)海神へ鏡目もうつらく奉る所かゞみは神の心をこそいそつ

れ(抄)ツラく打ナガメツラく思ヒツマケタルサマ也

めもおよそぬ(源 繪合)十りくや姫の云々神世の事をめればあささりなる女め及バ

ぬからんりいと(同 帝木)四十めもおよそぬ御あささまも

めもおよそぬ(源 梅枝)十ありでのさういともぞ云々めもおよそぬこれいとまる

りぬべきものりなど興いめでたまふ

目も口もあきてるさり(宇治拾)二左京のりとも客人もあきれてめもくちもあきて

るたり

補めもあそぬ(月清)三「霜さゆる杉の板まのめもあそぬ誰まつ袖は月こゆるら

ん(枕)九あらがひ論いを聞ゆるいめもあやま濛まいきまであいなくおもてぞあ

りむや(好忠集)「けを寒いさえゆく冬此よもまがらめたまもあひ衣うせれて前

目あふ
所ニモ出

めもあや(源 總角)卅今すこいおもひよらぬ事のめもあやま心づきかうかりて〇眼

も及そぬかどの心也(空穂 俊蔭)八けたものを友いて木のうつほを住りいて

おひ出たれどめもあやある光をひてかんありける(同 櫻の上)下六ちかうて見給へ

さ人々の御めいりてりかゞやきて此世よかゝる事あらト又おければめもあやま

えたり(源 若紫)十哥云々との給ふ御もてないことづりひさへめもあやなる僧都

「うとんけの花まちえたるこいちしてみやま櫻いめこそうつらねときこえ給へバ

補(著聞)十六あらがひつる侍さめめもあやまおやえてゆいし記事いて

めもあてられせ(方丈記)かさりゆくりたちありさまめもあてられぬことおほりり

めもさりて(源 帝木)四十めもおよそぬ御り死さまめもきりて(同 夕霧)五十おや

いづるまめも死りていとト

補めもみりくる人(宇治拾)つゆめもみりくる人もなれ

めもみえぬ(源 御法)五大將のきみもなみたくれてめもみえ給いぬをいひておや

りあけて見奉るい(伊勢物)六十かみたのこぞるいまめもとえ物もいそれいとい

ふ

めもとあそせ(源 總角)四十うとまいうつらく姉君をい思ひ聞え給ひてめも見合せ

奉り給いせ

め(源 少女)四十樂所遠くて覺つりなればおまへい御こといもめ(空穂 國讓)

中一。大將い若宮いノ手いとあやいくことやういかるものをぞめすやいやくか死て

さふらひたれどつゝまうてえまゐらせ侍らせ(古)下秋仁和寺菊の花めしける時
よ哥をへて奉れと仰られければ云々(源橋姫)卅琵琶めしてまらうとよそゝのり
給ふ(同末つむ)九御直衣めしてきかへ給ふ(同玉葛)四廿まうけのものめしあつめて

(右京大夫集)青色の御らきぬてふをいろくまおたりしをめしたりくバ云
ありいろの御からきぬとさくらをおりたるめしさりしよ不ひあひて(續古)下秋名
所百首哥人々よめしけるよ(續拾)下春内より八重さくらをめされけるよをへて奉り

ける(源帚木)四十めまよひりてりもとてまゐりぬ(同夕うほ)七めせばおんこた
へして(同)卅中將めしつればなん(同)廿右近をめしいで、隨身をめさせたまひて
(續紀)六京都召上天(万)卅二、「ひむがーのたきの御門よさもらへどきのふもけふ

もめすことよな(源浮舟)卅時方とめし、大夫の(狹)七下御ゆかとさりあかり
ちよしてめしなごされればあるりかきりある御さまながらもさくさせ給ひけり
めし飲食(宇治拾)七十冬ゆづけ夏水づけよてものをめまべきかりと申けり
(同)水飯をやくとめまとも此定よめさば更し御ふとり直るべきよあらまどて

○美の部

み(夫)四「もかのりもをををつゆけし小野山のやまのうへこそおもひやらるれ
實方

(後)秋下「秋の月ひりりさやけともみぢ葉のおつるかきさへこえこたるりな^此
貫之

もじの事(末分櫛)中五「さつき山梢をかみ子規なくねそらなる戀もさる哉(貫之
十九六十丁ニくはし
集)上「秋田の布よし出ぬれば打むれて里とほこより雁ぞきよける(後)秋上よみ
「天の河せゞのちら浪たけれと只こたり來ぬまつよくるし(同)秋中よみ「若

ぐれふりふりなバ人よみせもあへせ散かバをしみをれるあき萩(伊勢物)(玉葉)戀
業「あーべこぐたか、しをぶねいくをたび行りへるらん若る人をむ(同)(玉葉)
平「さく花の陰まかくる、人おそみありしよまさる藤のいろりも(六帖)五、「秋
賀業「さく花の陰まかくる、人おそみありしよまさる藤のいろりも(六帖)五、「秋
業平「さく花の陰まかくる、人おそみありしよまさる藤のいろりも(六帖)五、「秋

風をさむとよのあらむりへしきて戀かぐさめん衣りせさみ(月詣)雜上「夕立のそ
れぬとすればいたまあらともりかさりぬる月の影りか(万代)春上「わがやとよ咲
たる梅を月清とよか、來つゝ見る人もかな(金葉)戀下「あふこと舟人よこみ
こぐ船のみをさりのするこ、ちこそをれ(玉葉)旅忠見「難波がた行りふ舟のついで

繩くるともとえむあしのままを(山家)下「山ふかみいそよしたる水とめんり
つと、おつるとちひろふ不(同)同「熊のむ莓の岩山おそろしみるべかりけり
か人もかよとぞ(拾玉)「あまをぶね苦引りけてこぎつけよ瀆風さむみ雪もよこ

をる(同)同「谷ふりみいとせりつみよいで、ををたよ春の若るしとおもさん

(續後拾) 春下 一山たりと峯のさくらをたづねて都の花のみるべりりける(拾員)

下 一不ど、ぎまきかぞといそゞ山深み住りひかゝとひとやおもそん(拾愚)上 一春

ふりここしちよ鴈のかへる山名こそ霞あかくれざりけれ(同) 同 一山ふかみ岩きり

と不ぞ谷川をひりりませける秋のよの月(後拾) 春下 一道と不みるでへもめりト此

里もやへやのさりぬ山吹の花(續後撰) 羈旅登 一とさでゐる磯の松がねまくらよて

志ほ風さむみありつるるな(源 夕霧) 四十一里と不と小野のの原わけてきて我

も志りこそ聲をしまね(万) 十九あまり川河戸平清美(万代) 秋上鎌倉 一天原ふり

さけこれバ月清み秋のよいたく更よけるりか(續後拾) 春下 一見そめせバあらま

物を山ふり花よころのとまりぬるりか(新拾) 春下よみ 一底きよまかされさえ

せぬ水の面よ花のよ不ひせうついでぞみる(續後撰) 羈旅 一志もつ山からのした葉

をりりきてこよひのさねん都こひしみ(拾) 春 一春ふりみるでの川をみ立かへり

見てこそゆりめ山吹の花(同) 夏よみ人 一そこ清みかぐる、川のさやりよもそらふ

ることを神のきりなん(蜻蛉日記) 中 一えたこりと雪まよさける初花のいりよと、

ふよよほひまはりな(元輔集) 廿 一君こりと我もおいぬる別こそ志まよさりりとお

もひかされね(堀次) 一ぬきをうせみおれる衣のいりかれバ袂よ風をか不隔つらん

み(源 稚ら本) 九 泣み笑み(同) 七 しみえとみえきと(同 寄生) 五十 うれとみをかたきこ

え給ふ(貫之集) 一おくやまのみえとみえぬの年くれて雪れふりつ、かくすあり

けり(殷富門院大輔集) 一山河のさゞれが上の薄氷ゆきとゆりせとむせぞ、れつ、

(俊忠集) 一袖りけてをりみをらせみ花のいろよをむるよほひを人なとがめを(蜻

蛉日記) 中 一さでろものつまむむせぬ玉のをのたえとさえせみよをやむすせん

(後拾) 戀三 道雅 一みちのくのをたえのそとやこれからんふみ、ふませみこ、ろまどと

と(拾玉) 一 世中の河瀬よとゆるうたりたのきえみきえせと過るそりあさ(玉葉)

雜五選子 内親王 一雲がくれさやりよ見えぬ月りけよまちみまたせみ人ぞこひしき

み(山 万) 十九 さゝのそのみ山もさやよさこけども

補(み 壬二) 中 一夏の、れけみ下下の忘水志のびく、よ鹿やふそらん(月清) 上

一志を野よの今あそすらよ小鷹がり山のけみよ雀りたよる

み(身 枕) 十一 人よもかたりつがせ身を止められんとおもふ人のよさよ(同) 四

一十これのよのためよも人のさめよもさていみトきよろこびよ侍らせや

み(見 源 帚木) 廿 此見給ふるこたりよりあさけかくうとてあることをなんさる便あ

りてかすめいはせたりける(万) 十八 一をふのさきこぎよもどりひねゆすよ見と

もあくべき浦はあらかくよ **みる** **みむ** **みて** **みつ** **みぎ** **みぬ** **みらん** **みま** カナ

出 **み箱ノ** (詞花) 戀上よみ 「こがこひのふたをかされる玉くしけいりすれどもあふ

りたぞあき **みいたす** (伊勢物) 廿三 歌云々といひてといたまよからうとてやまど人こんといへ

り **みいたして** (源 末摘) 五 またたりうしもさながら梅のりをりしきをこいたしてものい

給ふ云々 (同 葵) 廿四 つねよりめとめてこいたしてふ給へり **みいれ** (源 空蟬) 三

わらもかれほどの人かとも事よといれ追従せせ心やすし云々 木丁かどもあつればよやうちりけていとよくこいれらる (同 蓬生) 十 さればこそ

ゆき、の道よこいるれど人を見もあきものをとおもひて (同 夕顔) 二 門のこみ のやうかるをおしあけたるみいれのほさかくものそりあきすまひを (同 手習) 四十

左衛門のこのこたくのちりたる人よあへしちふとてかゝる所まつけてのこなと りとよこゝろよせの人々めづらしくて出きたるよそりなれことゝなるみいれな

どしけるやどよ (同 夕のほ) 五十 これよみいれけんたよりよかくかりぬることゝお

ぞいづるよもゆゝくなん (同 すま) 十五 さの海の中の龍王のいといたうものめで

さるものよてこいれたるかりけりとおぞまよ (同 滯標) 廿四 いさゝりの事せんよ神も

こいれりままへ給ふべきよもあらぞ (同 寄生) 四十 わりぎみのいりよかり給ふ日々

ぞへどり給ひてそのもちひのいそぎを心よいれてこものひわりこあどまでこいれ

つよよのつねのなべてよのあらまとおぞし心さして **みろく** (夫) 廿一 「わがこひのかねのこたけのりねからばみろくのよよもあそま

ものを **みそるり** (山家) 詞 書 かつ野かぞ申わたり過てみそるりされたる所の侍るを

みそり (山) 御墓 (玉葉) 雜四花山院入 「消よしをうしとむりりのみそりやまさ

れたつ雲れゆくへいらせよ **みそつ** (源 玉葛) 卅 命ながくてわが心がさをみそつるたぐひおるかる中よ (同

葵) 卅 これあそりたみよ情もみそつべきこさなれ **みそなつ** (源 帚木) 七 かくりまならぬ身を見もそなたでなごかくしもおもふらんと

(同 柳) 初 親をひて下り給ふれいもことよなけれどいとこそなちがたき御ありさま

かるよことつけて (同 をとめ) 廿四 をさなき人々のこゝろよまらせて御らんとそなち

けるを心うくおもひ給ふるなどきこえ給ふよ

みとやせ(源 初音)十紅梅の咲いでたる匂ひなぞみとやす人もあきを(同 梅かえ)八

をさくしとやすまどきよいつさふまどきを(古)八春上よみ「山たかき人もさめぬ櫻をないたくかわびをわれみとやさん

みとてぬ夢(古)戀二「いのちよまさりてをしくあるもののみとてぬゆめのさむるかりけり(後)夏よみ人「よそあがら思ひよりも夏夜のみとてぬ夢ぞそりかりける

みと一御階源 桐壺 九 廿みと一のものもとみこさちかかんちちめつらねてろくどもあそトなよ給ひり給ふ(同 わか)上ノ忘られたる枝をこしおしをりてみと一の中の忘なの不とよる給ひぬ

みよどりて(源 わか)廿上ノ身よどりてのことよもあるまどく思給へたち侍るをりをりあるを(同 竹川)四十人のかよのとがとみぬ事も我御身よどりてのうらめしくかん

みよりへて(源 若菜)下五人のかく身よりへていみとく思ひの給ふをえいあひさてバ(同 柏木)卅かくしも身よかふべき事よやありける

みよそふりけ(信明集)卅五月のせちよやあらん題慥よ忘らそ「りたきかくおもへる駒よくらぶれば身よそふ影のおくれざりけり(狭)一上妹君ノ權中納言の身よそふりけよてさこぐなれば

みよがる(後)秋下よみ「もあそよきはよいでやまき草をればみよをらんといたのまれなくよ

みよくやり(源 浮舟)七例のことよおもひいでぬそらからのみよくやりあるもこひしく

みよくき(源 柳)廿それの老て侍ればみよくきぞ(同 紅葉賀)十此人々の男とてあるのみよくしこそあれ(神武紀)九大醜此云鞅奈彌爾句(万)卅三「あなみよくさ

りいらをよと酒のまぬ人をよくみば猿よりもよる(源 帚木)七みよくきかたちをもみよあまる(源 桐壺)三身よあまるまでの御こゝろさ一の万よかたトけあきよ(新

勅)賀よみ人「うれしさをむりトのそでまつみけりこよひのみよもあまりぬる哉(源 あかし)三身よあまれるものどもおほくたまをりて(同)廿よよあのものお

ぞいたづぬるかこそかゝるあまのなかよくちぬる身よあまることなれかとおもふよ

みよーむ(拾)戀一「みよーみておもふこゝろのとふればつひまいろよもいでぬ
べきかか(續古)秋上「吹よれば身よもいみける秋風をいろあきものとおもひける
りか(源 帚木)四十ほのりよみえ給へる御ありさまをみよーむをりおもへるすき
心ともあめり(詞花)秋和泉 式部「秋のゝいりある色の風をれば身よーむをりあそ
れなるらん

みぞめ(枕)五ノあまりある御身ぞめりかとかたそらいたく

みと(土佐日記)からく神ぞとけをいのりて此みとをささたりぬ

みとぞー(枕)四ノありつることをかさり聞えさせればたれもくみつれといとら
く縫たる糸針めまでやのみとぞーつるとして笑ふ(源 野分)三御屏風は風のいたうふ

さければおいたゝみよせたるよ見通しあらなるひさしのおまへまる給へる人々
(同 空蟬)三よーさま見通し給へ(榮 若水)五中門のさたりひんがいのらうの

つまごのみとほしよさるべき隨身あとのみやらるゝよ

みどり(薄萌黄)古(春上)「ときとなる松のみどりも春くれば今ひとほの色をさり
けり(拾玉)七「打むれてさうなつみつる春の野のみどりぞとけてきよをかくかり

みさりのもやー(夫)廿長明「もや過よ人のこゝろのよこた山みどりのもやーかけよ

りくるゝ(夫)輿地志云、諸亡命聚綠林山中注云綠林山荊州山名也

補 みどりの洞(風雅)雜上院御製「雲深さみどりのほらよをむ月のうき世の中は影ハ

絶よき

みどり(拾)戀一「あふことのかたなるざりするまどりこのたゝん月よもあそとと

やする(万)十二「とがせこよこふとよーあらーみどりこのよなきをいつゝいねが
てらく(うつは 忠こそ)二つりさうふりうるまで見おやさんどこそおもひーり

あーよーもまたあらぬみさりをみせてん事ものうーろめたくうきことゝの給ふ

みとがむ(源 蜻蛉)卅人みとがむをりおやさかるとさのえー給を(狹)四下みと

がむべき御ふでのをさびよあらざめりと思ふ(源 夕顔)三四十み奉りとがむる人

もありて

みとのまくもひ(神代紀)上共爲夫婦(同)遣合(顯季集)万代(戀三)修理「いくさり

りみとのまくもひちぎりありておやのいさめよさのらざるらん(古事記)上美斗能

麻具波肥(清輔集)「契りおきー志ちのそーがきみえねともみとのまくもひ月日へ

よけり(奥儀抄)中或本よの爲夫婦(ミトマツ)とるけり古哥云「まきとやと人づてからぬこ
との葉をみとのまくもひまでもおももせ

補 みののこもり (枕) 廿一 御さうしはけうさんしてみとのこもりぬるもいとめでたうり

みとく 徳ノ所ニ (源 關屋) 四 かうふりあどえいまで此御とくよかくれたりしを (落

くる) 四 まゝをかく子どもよろこびをけるを御とくとよろこびければ (同)

同かく爲べきこといせをさきいりめしう給へば御とくいやまさりあり (續世

繼) 九ノ 御とくよ佛よなりなんこととて手をすりてよろこびける

みとく 見解 (狹) 三上。今姫君またまくりしうもつゞぬもどものいとをさな

くあさましきさまある何とみとくべうもあらぬをせちまもればあめつちをふ

くろよぬひてとあるの母代がならし聞えたるいそひことなめりとみゆるよ云々

(空穂 初秋) 卅 一うそくこくいろづく野べのみかへしうゑてやみま露のこゝろ

をこれがこゝろみとき給ふ人ありやとて打出給へば兵部卿のみことりて御らん

トて心え給えぬ

みとむらひ (うつは 國讓) 中六 こなたよすゑ奉り給ひて御目をかたぎみとふらひた

まへ (源 蓬生) 八 姫君のおんありさまのこゝろぐるしけあるもみとふらひきこえぬ

かど

みどころ (源 帚木) 四 おのりトうらめしき折々まちがはからん夕暮などのこを見

所のあらめ (同) 御らんと所あらんこそ (同 稚う本) 四 見どころある御ふみのうそ

べさくりと云々 (同 をとめ) 五十 いとさうやうよつきせぬ御ありさまのみどころお

はりるよ (枕) 三ノ あゝの花さらし見どころなけれど (狹) 四 かわりり見所おなり

るを

みとき ミトキハ精進ニテ飯ヲ (空穂 國讓) 卅一 御ときまゐりそゑたれときこめさ

ぎ (榮) 五 かねりくの御ときせさせ給ふもいみじうあそれよりか (伊

勢集) 七 もとをみ給ひし所は御門おそしめて御とき死こめを (榮) 七

いづこよもそのまゝ皆御ときよてあけくれ佛神を念ト奉り給ふ (同 衣の珠) 五 御

堂よのかくと聞せ給ひて云々 御ときまゐらせされさきこめさぎ

みときよく 御時 (うつろ 吹上) 十八 みりご御ときよく打笑せ給ひて (源 藤のうらと)

八 御ときよくさうぞきて藤のうらとれどうちぞんと給へる (うつろ 藏開) 十一 ある

トのおとご御時よく打わらひ給へばひとたびはとこらふ (同) 十五 御せうそこ

かくかんと奏し侍りつれば御時よく御らんとて (同) 中 文さいの何りひとて御時

よくわらせ給ふ (同 俊彦) 七十 左大将どのもかへり給ひぬ御時よくあそびて入給

ふ(平家物)九。二度の^{けの所}か梶原平三これをきよめてこれの私のさうの殿さらのふりく
でこそ河原兄弟をばうたせされ時よくなりたるぞよせよとて梶原五百よきい
たのもりのさりも木をどりのけさせて城の中へおめいてかく

みとこ(万代) ^{維五増}「あそもりくこと見一人のきえよよひかき身もあそ
どまるらん(山家) ^下「山ふりみいりて見と見る物のみをあわれもよほすけしき
かるかな

みとこ(神功紀) ^三爰定神田而佃之時(夫) ^{廿二}「さゞかみやまがれかみたのみ
どいろよけふとるかへりよろづよのため(同) ^{爲相}「いよへの神れみとこあど
いあれはいまもたねまけあまれむらこせ(詔解) ^二五御戸代ハ或人の御年代也と
いへるよろ一年とい稲をいふ神の御稻をつくる料の田也代ハ苗代をいふ代よ
即田のこと也 ^{云々}

みとこ(儀式帳) ^一御田代御田乎佃奉豆とありを田とかくの誤也(風雅) ^{維上}
「ゆふりけてけふこそいそけさかへとるみとこ(神領ノオン) ^田の神の宮人(草庵集) ^夏「を
みよりのみとこ(おたよ) ^{志め}とへて神のをとめ子さかへとるなり(おたノ) ^{おほ}
んヲおトノ云例オモヒエズ猶考べし

みとひらき(夫) ^七俊成 「みづがきやさ月れけふのみとひらきかざるあやめのかさへ
かつり(壬二) ^上「神山のむつきのかりば月さしてとりれむつねよみとひらくな
り(玉葉) ^{神祇}「十日あまり四よといふよのみとひらきひらくる御よのかくぞたの
しき ^{正月十四日加茂}
社御戸開始也

みとせ(夫) ^{卅六}衣笠 「我戀ハ海驢のねながれさめやらぬ夢なりながらたえやと
てかん

みち(源) ^{鈴虫}「みちをかくしそろへけてたき匂ひたる

みち(伊勢物) ^廿もみちのいとおもしろきををりて女のもよみちよりいひやる
途中よ(源夕顔) ^卅かくあやしきみちよ出さちても(古) ^羈かひのくよへまりりける
時道よてよめるみつね(源ゆかほ) ^十ありつきの道をうかゞせ御ありりみせん
とたづぬれど(同) ^廿「いよへもかくや人のまどひけんこがまたいらぬ志の
めれ道(同) ^五いづれの道よさどまりておもむくらん(同) ^五「過よもけふこり
るよも二道よゆくりたいらぬ秋のくれりな(同) ^{玉葛} ^廿かくりそりなるみちよても
供人のすくあき也(古) ^{戀五}「こがやどの道よかきまであれよけりつれあき人をま
しのびたるみち也 ^{遍昭}

つとせーまよ

補 みちそー (隆信集) 「なり川の水よせりれーみちそーをよたーてけりときくぞ
うれーき云々 「けたよりもかよひやするとまつべきよかよとすらんかりれみち
そー

みちよいる (元輔集) 廿山寺よまりりたりーをある人のほうーよかりよたりといひ
侍けれバつりそーける 「うき世もーりりよなーやといへでーを道よ入ぬとたれり
つたへー

みちとちて (源明石) 三雨風ノ内よ参り給ふ上達部かどもをべて道とちてまつりて
どもさえてかん侍るか云々

みちとせの桃 (拾) 賀恒 「みちとせよなるてふ桃のことより花さく春よあひよけ
る哉 (續古) 賀時文 「みちよへてなるてふ桃の末れ世の花れ盛の君れみぞ見ん

みちりく (源) うつせみ 十身ちりくつりふ人よかん (同) 帯木 五十身ちかくからーつ
見給へり

みちりひ (源) あかし 三あやーきすがたよてそぢ参れる道りひよてたよ人り何ぞ
とたよ御らんどよくべうもあらせ (河) 道ノ行ナカヒ也 (花鳥) よ (篁日記) 一玉ぞこ

の道りひなりー君かれどあどそりもなくあるとあらせや

みちつゞき (夫) 廿二 爲家 「あまのそむ里のあがてれ道つゞきかぎりあらをやうらみあ
くべき

みちづら (宇治拾) 五山科のみちづらよ四の宮河原といふ所よて (同) 七道づらある
人の家よとゞまりてあけぬれバ鳥とよまおきて

みちつくり (夫) 廿二 家長 「こが君のあまねきみよの道つくりくがめるみをあそれと
見よ

みちかき (道中) 狭 三上足音いとおどろおどろー近うたよらせ道中より 詞物け給
くる云々

みちのべ (堀次) 樹陰 顯仲 「道のべれ木の下みづをむそびつゝ夕かけまつぞひさーかり
ける

みちのそら (和泉式部集) 一 「ゆくさきもそぎぬるりよも戀ーきの道のそらよや行
とまりなん (万) 廿五 挽歌 いめのこと道のそらちよこりれる君 (小大君集) 「あま

れとも草をれ露やとれまーみちの空よてきえをまーりバ (新古) 戀三 道信 「こゝろよ
もあらぬ我身のゆさかへりみちのそらよてきえぬべきあ (源) 夕かほ 四 十かゝるみ

ちの空よてもふれぬべきよやあらん(同 手あらい)初限のさまなる親の道此そらよ
てかくやからんとおどろきていそぎものうたまへり

みちのくよかみ陸奥紙(宇治拾)七、大柑子をこれのさかくらんたべとて三いとち
うさしき陸奥紙よつゝみてとらせたりければほころびぬを陸奥紙の文をその
ほころびのもとよむをびつけてなげかへしるなり(源末つむ)卅みちのくよ

紙のあつてえたるよ匂ひさかりふかうしめ給へり(枕)二ノ若ろくきよけある
みちのくかみよいとそをうかくべくいあらぬ筆して文りきたる(同)廿みちのくよ
がみのたゝうがみの(源橋姫)四十みちのくよかみ五六まいよ

みちの國のおくの將軍(狭)一、上まことよする人もかくて便りなきよ思ひこびてみ
ち此國のおくのさうぐんといふものゝめよかりてやいなまよと

(補)みちのま(枕)廿一、いつのまよりさうぞくいつらん帯の道のまよゆひて
いさとおひくる(源海標)廿六みちのまよかひあるせうえう遊びのゝり給へど
みちのひと(うつや 吹上)七かきき題いたさんとて學問せさせたる道の人よもあら
せ年よりくしてあそびますゝめる者どもなり

とちくる人(伊勢物)十二、みちくる人此野のぬを人あかりとて火つけんと(万)二
段

四十 志貴親王薨時作歌たまげこの道くる人のなく涙ひさめよふれば

とちまどひ(後)二よみ一「よもそがらぬれてとびつるから衣あふさり山よとちま
どひして(うつほ 藏開)卅九左大將の君こそおそいたれと宮よ聞ゆれば宮詞あなお
も不えせあてふ道まどひぞといもせ給へれば(貫之集)「あたらしき年れよより
よ玉がこのとちまどひする君うとぞおもふ

みちことよ(榮 玉のかざり)六、道ことよならせ給ひぬるひとのかくのみあるこざか
るぞあされよ心うきや

みちさまたけ(貫之集)上、四十「おもふことありてこそゆけ春がそと道さまたけよ
たちわさるりか(六帖)下、「おとよはく花みよくれバ秋霧のみちさまたけよ立とさ
りつゝ(狭)三、下川霧さへ麓をこめて道さまたけよたちわたりたるるせきよもりわ
づらふ水のおとをひもいとむせりへり云々(源柏木)卅四かくいミトと思ひまどふ
よ中々道さまたけよもこそとてなきやうよおがしほれたり

みちゆき(長能集)紅葉ある人の家のまへをこたるとて「みちゆきよみれどもあり
ぬもみぢりかうべこそ人も家るせりけき

みちゆき(万)十一、「玉鉾のちちゆき占ようちかへばいもよあさんとこれよ

ひつる

みちゆきぶり(風雅)春中「かへる雁もねうちかき白雲のみちゆきぶりのさくら

なりけり(壬二)中「ことづてんながめもたえぬりへるかりみちゆきぶりの春雨の

そら(古)春上躬恒「春くれば鴈うへるかりをらくもの道行ぶりよことやつてまゝ(躬

恒集)下ノ「ことさら見よこそ來つれさくら花みちゆきぶりとおもえざらん

(同)「玉銚のみちゆきぶりは山ざくらをるとぞ(六帖)五(万)

十一「玉万このみちゆきぶりはおもえぬ妹よあひみて戀ふる頃りも(續千)雜上

十二「故郷よなきておけくことづてよ道行ぶりの春のかりね(新勅)春下鎌倉一さ

くら花ちらばをいけん玉銚のちゆきぶりをりてかざらん(都土産)たゞ道行

ぶりはみすぐさんもねんかきやうは侍りうら

みちゆき人(拾)五丸「こひいなば戀もいねとや玉万この道ゆき人よことづてもか

き(同)夏貫之「貫之集」(六帖)「夏山のかげをいけとや玉万このみちゆき人もたちと

まるらん(風雅)春中直義「花見よとぞるいむれつゝ玉万これみちゆく人のおほくもあ

るりあ

みちゆきぶり(新六)一霜月「霜さゆる鴨のかそらは駒なへて道ゆきぶりの山あるの

そで

みちく(源)初音三おのく思ふことのみちくあらんり(同)桐つは廿い

よくみちくのさえをならせ給ふ(同)花の宴十みちくのもの上手さゆ

おほりる頃ほひ

道々(源)帯木卅三史五經のみちく(同)廿おやけよつりうまつるべき

道々(源)きことをいへて

みちく(新古)秋下俊成「とふ人もあら吹をふ秋の來てこのもようづむやどの道芝

みちく(和泉式部集)上「夏の日れあはあたらればさながらさなくきゆ

るみちく(露)

みちく(千載)肥後一「またあらぬ人をとめてこふる哉おもふころよみちく

るべせよ(同)「さきよたつ涙とならば人いれを戀路よまどふみちくるべせよ

みちひる(源)葵十「ちひろともいりぞらんさためなくみちひるほのれどけ

りらぬ(新古)釋教崇徳院「おこなべてうきみいさこそあるみがさみちひるし平のか

さるのみり(万)廿三「りりえより朝しほみちよよるこづみかひありせばつ

とよせまゝを

みちびく(源 玉葛)卅佛神の御みちびき侍らざりけりや(同 末摘)十かりくゝをるみ

ちびきまいとちしきことやみえかんとおもひけれど(同 空蟬)七いとつゝましけれ

そみちびくまゝもやの木丁のかたびらひきあけて(同 あらし)七すみよしの神の

みちびき給ふ(同)廿さらばみちびき給ふべきよこそあかれ(續拾)釋教「よしさ

らむこれといさゝトあま小舟みちびく汐の浪まきりせて(補)月詣(同 賀茂)「すゝめ

いたをみつの車のわづりよもみちびりぬとさくよしもち(同)同季定「この世を

ばうとどころよかけつればみつの車よみちびりれなん

みちもみえ(玉葉)上(秋云々)庭の草道もみえむしりて虫のさきければ西行「こけ

て入云々

みちもせ(千載)春下(義家)「吹風をかこそせきとおもへともみちもせよちる山ざくら

りか

みちすがら(源 夕のほ)十四(いりかり)けん契りぞと道すがらおぼさる(夫)四(後京極)「す

せり川浪と花とのみちをがらやせをこけて春のこをれ(千載)旅待賢門「みち

をがらこゝろもをらよかめやる都の山はくもがくれぬ(源 晴崎)卅みちをがら

とくむりへとり給を成まけることくやう

○岩のかけ道(夫)廿一(爲家)「玉くしけ箱根の山は明方よ友よびりそすいとれかけ道

○不きのりけ道(夫)廿一(西行)「あやふさよ人めぞ常よりれける岩れりけふむ不きの

りけみち

○谷のいと道(夫)廿一(本明)「けふよりの谷の岩道雪ふりて跡さえぬべきみ山べの里

○つたのちを道(夫)廿一(行意)「うつ山のさこそいかねて聞しりとかすみをこくるつた

のちを道

○かみたの道(夫)廿一(能宣)「こりるべき別れなりせばおもふとも涙の道よむせをま

や

○のちの細道(夫)廿二(西行)「おいてゆく袖よもつゆのかりけり萩のみしけきのちの

ほそみち

○八雲のみち(夫)廿一(家隆)「このみよし八雲の道もたえそてぬ君もいつものうらめ

の世や

○あら道(夫)廿一(中務卿)「いそくまの山のあら道たむけしてこゆるけふもをられ

ぐるゝ

○木々の下道(夫)廿一(定家)「うちをらひやさかりとびぬ雪をれの木々の下道おもがそ

りして

○きしみち(夫)廿一信實「ひさぎおふるく山かけのきしみちのまぐれてたへぬ秋の

いろりか

○みつの道(夫)廿一衣笠 内大臣「かりをめよみつの道をもをへむバひとつの門をいり

であらま

みる(貫之集)「さくら花ちとせみるも鶯もこれあくよのあらとぞおもふ

みる海松(後)友則戀四「みるもかくめもあさうみの磯よいでかへるくもうらみつ

るりか(續千)戀二雅有「あま衣ぬれそふそでのうらみてもみるめあぎさよもいふされ

つゝ

みる所(源東や)八うしろみよせまほしう見るところありておもひをどめし事な

り(同)柳五十ささりりねたけなりし人のみるところもありかどこを思ひ侍りつ

れど

みるともく(源東や)廿かへすとみるともくあくまどく

みるりひあり(源常木)卅みどれ給へる御有さまを見るりひありとおもひ聞えたり

みるまよ(源常夏)三なれくからぬほよ聞えりまよかどよまひてみるま

まよいとあいきやうづさりをりまさり給へれば補(新古)冬式子内親王「見るまよ冬ハ

来よけり鴨のるる入江のみぎとうををほりつゝ

みるゆめ(拾)戀四よみ「みるゆめのうつゝよあるのよのつねぞうつゝの夢よなる

ぞかなしき

みる目(とりりへせや)二あり君やまことよあひおぼさばいとかくいちどるくなり

てあしとまふぞみる目のかたくゆきあふせあるまよき事こそりやうよのおぼさめ

(古)戀四よみ「いせのあま此朝を夕をよりづくてふみるめよ人をあくよもがが

(後)戀三よみ「みるめりるりよぞあふみよなよときく玉ををさへやあまのりづり

ぬ(源常木)二みるめのまへよつらきことありとも(同)六みるめのなさけをばえた

れむまどくおもう給へ侍る(同)若紫七そこのみるめも物むつりしうをどのたまひ

て(同)橋姫四みるめもてあしもけたりく(同)椎か本九いみどきこともみるめのま

へよて覺つりかりらぬこそ常の事なれ(後)戀四よし「あふみてふかたれしるべもえ

てしがをみるめあきことゆきてうらみん

みるく(源登)六またいとあるまよきことりかどみるくおどろくくとりか

しけるがめおどろきて(同)桐壺九むかし御からをみるく猶おまをるものとお

もふがかひなければ(同)うさふね(四十)まろからばりさりり此御思ひをみるくえ
かくてあらト(同)あふひ(廿)かつそこをこれ給ふことゞものあるをみるくもつ
せおおやうまごへ(補)後拾(雜二)道綱母「かゝる木比もりの下草くれとよなをたの
めとやもるをみるく(風雅)春上「みよこれよ一の山の春霞たつを見るく
なほゆきぞふる

みを(水脈)立蕃式(蕃客朝貢ノ)水脈母教導賜(弊登)宣隨爾迎賜(波久登)宣(源須磨)十五

「あふせおき涙の川まらづみーやながるるみをれとめかりけん(狹)四下「おち
たぎつ涙のみにをいそやけれど過まらたよかへりやいさる(土御門院御集)「冬の
日ハ雲のみをよてそやければなぐるゝとのまがらみもがか(六帖)三「春たちて
風や吹とくけふみれば瀧のみをより玉ぞ散ける(後拾)哀傷大「涙川をがるゝみを
とあらねそや袖さりをバ人のとふらん(和名)一水脈船美乎比岐能布(万)十二

「神山の山下とよみゆく水の水尾不絶者(後)吾妻(同)廿廿五四方の國より奉る貢
の船ハ堀江より美乎妣伎一つ、朝なきよかちひきのなり云々(同)十八「堀江より
水乎妣吉一つ、御船さすまづをのともハ川の瀬申せ、右件歌者御船以綱手浜江遊
宴之日作也(万)十五、みつの瀧びハ大舟まらちまぬきからくよ、こたりゆりむ

とたゞむりふみぬめをさしてそをまちて美乎妣伎ゆけをおきべよハ云々(同)廿四
「不り江より美乎左可能保流梶のおとのまかくぞならバこひかりける(同)廿四
「不りえこぐ伊豆手のふねの可治都久米おとをそたちぬ美乎波也美加母(同)七ノ
「さよふけて堀江こぐる松浦船かちの音高ハ水尾早みりも(同)「武庫川の水尾
急嘉赤駒のあかくそゝぎまぬれよけるりも(同)十三、三あすりの川の水尾速生ひた
めがたき石枕こけむをまでよ云々(補)新後拾(戀一)為重「泪川袖の中なるみをおればせ
せをそやと知人もな一(玉葉)夏實家「五月雨ハいさら小川をたよりよてそともの
小田をみをよかいつる

補みをそやながら(古)雜下哥めける時奉るとてよみておくよかきつけてた
てまつりける「山川のおとよのみさくもゝきをみをそやながらみるよもがか
みをる(伊勢物)四十昔男いもうどのいとをりけかりけるを見をりて
身をわけて(後)戀一よみ「みをわけてあらまろくぞおもゆる人ハくるよとい
ひけるものを(補)古(戀五)友則「秋風ハ身をこけてもふかかくよ人の心ハ空よあるら
ん(後)冬よみ人「みを分て霜やおくらんあ人のことのをさへよかれゆくりか
これハ身の内
お分入ことなり

増補雜言集覽 卷之四十九 三十七

みをこけたるやう(狹)四下同一身をこけたるやうよかたみよおもひかたしこれバ
 ○みをこけぬ(伊勢物)八十一「おもへどもみをしこけぬばめがれせぬ雪のつもるぞ
 わがこゝろなる(古)別「思へども身をしわけぬばめがれぬ雪のつもるぞ
 へてぞやる(後)別「みをこくることのかたさままきりぐみりけをりををきみよ
 をへつる(源)總角廿。大君詞中身をわねたる心のうちのみまゆづりてみ奉らん心
 ちかんをべき

身をりへて(源)少女二十此きみの御とくは忽しみをかへたるとおもへば云々(同)朝

顔)十「みをりへてのちもまぢみよ此世よて親をわするゝためありやと(同)明

石)五「まこしものおぢゆるかぎりハ身をりへてこの御身ひとつをまきひ奉らんと

とよみて諸聲よとけ神をねんと奉る云々(千載)戀二徳大寺「いりて我つれなき

人よ身をりへてこひしきやどをおもひしらせん

補身をつ(新千)神祇「今もかたのみぞこたるむりし我身をたてそめしかも

りものあみ

身をつむ(顯輔集)忘れぬことを人の申せるよよりて白河院の御かこまりある頃

唐の鏡の一尺をりりなるを小野よ奉るとてかきつけし「身をつみててらしをさめ

よまをりぐみたが偽もくもりあらまな(同)こもりたるたりし比月のありき夜平等院

僧正のもとよ奉りし「みをつめばたを引雲もなき空よこゝろをそくもをめる月哉

(源)總角廿「けしきたま忘れ給をせむつみもやえんと身をつみていと不しけれバ

(拾)戀一「不どもなくきえぬる雪のりひもかし身をつみてこそあそれとおもそめ

(同)戀六「身をつめば哀とぞおもふ初雪のふりぬることたれよとまよ(順集)

三「身をつめば物思ふらし不とぎすなきのみまごふさみたれのやみ(拾)戀二

八し「春の野よおふるあきかのこびしきハ身をつみてごまひどのしらぬよ(同)同

「みをしれば露をあそれとおもふりなありつきごまいりでおくらん(後拾)戀五

「身をつみておぢつりあきハ雪やまぬかまがの野へのこかあしりけり(同)哀出羽

弁がおやまおくれて侍りぬるをきして身をつめばいとあそれなる事をといひつり

とすとて(同)「みをつめば入もをしま秋の月山のあなとの人もまつらん(散木)

「身をつめば忘れぬ水鳥の心のうちをおもひこそやれ

みをつぐく(万)十二「みをつぐくし心つくしおおもへりもこしよももどないめし

みゆる(忠見集)「吹風よまきることもをづくしよるりたあき戀もるるりな

(古)戀二「君こふる涙の床よみちぬればみをづくしとぞ我ありぬる(土佐日記)

興風

みをづくーのもとより出てかよまよつきて川尻よ入云(万)^{十四}「どほつあふみい
かさを江の水乎都久忍みをつくーあれをたのめてあさましものを(延喜式)^五雜式云凡難波

津頭海中立二潞標若舊標朽折者ヲ搜求拔去(万)^{十二}水ミナツク咫衝石心盡而○信友云ミをハ水

脈ノ字ナアテタルガ本義ニテ其水脈ノ標ヲナミをつくート云フニ潞標トカクモ合へ

リサテつくーノツハ助辞くーハ籤ノ義ナルベシミを木ヲを杭ナドイフヲモオモフ

ベシシカルニ(万葉)ニ水咫衝石ト書ルハコノみをつくーニテオノヅカラ沙ノ満干

ヲモ量ラル、意ヲ用井テ書ナセルモノナルベシサテ又潞字今ノ字書ニ水ノ名ト

ノミアリテ義詳ナラズ潞標ハモト漢語ナルベシ出處考フベシ

身をかくる(古)^八誹諧よみ人しらす「世の中のうきたびごとよみをなけさふかき谷こそあさ

くなりなめ(源あかし)^卅いまぞまことよ身もなけつべきこゝちする(同わあ)^上

二まりよ身をなぐる若公達のぞかのちるをーしみるあへぬけしきどもを見るとて

(同螢)^十とねりさゆさへえんかるさうぞくをつくーて身をなけたるてまどそーな

どを見るぞをりーかりける(宇治拾)^一廿七狐身をなけてよぐれどもおひせめられて

え逃ぎ

身をうく受(源若菜)^下ノ。物ノ今こそかくいみトき身をうけたれいよーへの心の

こりてこそかく迄も参りきたるかれバ(同夕霧)^廿アサリ詞 女人のあしき身をうけ長夜
のやみよまどふハ

補 身をくごんト(榮衣の珠)^{四十}心うきこと、身をくごんトおぞすもことわりよ

いみト

身をくたく(源若菜)^下ノ。物ノ命もさふまどく身をくたくしておぞすもことわりよ

れバ

身をあせせたる(古)序かの御時よ云々柿本人丸なん哥のひとりありけるこれハ君

も人も身をあせせさりとといふかるべし

身をーる雨(和泉式部集)上「おぞつりかたれぞむりーせかけたるハふるよ身をー

る雨りかみたり(源浮舟)^{四十}「つれト」と身をーる雨のをやまぬハ袖さへいとゞ

みりさまさりて(伊勢集)卅「かたみよ身をしる雨のふりーりか我もせきあへせ

君もこーりば(和泉式部集)下「みー人よこせられてふる袖よこそ身をーる雨ハ

つもをやまね(六帖)一「天のそらなるかみいりよおもふらんけふハみをしる雨と

こそふれ(古)戀(伊勢物)百七「かぞト」思ひおもさせとひがたみ身をーる雨ハ

ふりぞまされる(後拾)戀二よみ「こせらるゝ身をーる雨をふらねども袖をりり

こそりさらざりけれ(新古)戀二「あふことのむかへき空のうき雲の身をうる
雨のたよりかりけり正明云便の縁といふほどの事あり

みをとる(夫)八「ひろせ川渡りせせきのみをさるしみりさそふらさみたれ
のころ補(千)夏「さみたれの水のみりさやまさるらしみをれさるしもえをな
りゆく

みをすて(源夕顔)卅かつのいとあやしくおせえぬおくりなれども御けしきのい
とトきを見奉れば身をすて、ゆく(同)浮舟廿。供ノおろりからぬ御けしきを見
奉ればたれもく身すて、かん(同)總角五夢よてもおろりならんよかく迄もま
るりくまトきを心のほとやいかゞと疑ひて思みたれ給とんが心ぐるしきよ身を
て、かん(同)九十けふの御身をすて、とまり給ひぬ

とこ酒ヲ醸(堀次)社「千早振いづもの森よとこをゑてねきりかけさるもとち、
鏡也仲實「あらざりつみとこをゑまつるみそぎ川神さへうけんおもひせんと
らをか(夫)九隆信「あらざりつみとこをゑまつるみそぎ川神さへうけんおもひせんと
ハ(万)二ノ「なき澤のもりよみとこをゑいのれさもとこが大きみいたりひいられぬ
水とた水のタワミマ(千載)冬「いづと川の水のみとたのふいつけよ岩まの氷る
ガル所をいふ仲實「いづと川の水のみとたのふいつけよ岩まの氷る
冬ハ来よけり補(新勅)戀一「なみど川袖のとわたよわきりへりゆくたもかきも
俊成

のをこそ思へ(玉葉)冬「山川のみとたよどむうさかたのあわよむすべるうま
氷りあ(新千)戀三「思ひ川とわたより、埋木のかがれてさへの名こそをいけれ
為氏(神代紀)よ曲浦(枕)十「な、わたよまがれる玉の緒をぬきてありとや、とち
ハせやあるらん

とこた(源葵)卅あそれととこた給ひて(万)十三うみもまひろしとこたの志
まの名さり向ニミワタス(同)十三とこたよいもらいた、是方コトサよ吾のさちて
トコロチイフ(源朝かほ)四かれ、ある前裁のころをへもことよとたされて(同)はたる七
うすもの、かたびらのひまよりいれ給へるよひとまをりへたてたるみとた
よ(補)(拾玉)四「郭公杜比梢の見とたよ中やどしむるまつの一むら

補見わさせ(後拾)道濟「みとたせばとこたの近くかりぬらんをぎぬる山のか
とみへたてつ

補見わづらふ(伊勢物)百七雨のふりぬべきよかん見とづらひ侍る(源)椎か本廿
みわづらひ給ひて

補とこざ(伊勢物)十七云々うせ給ひてな、七日のみとこざ安祥寺よていり云々
そのみとこざよまうで給ひて

みこき(源夕霧)十なまがいのこい奉らざりつるを(同末摘)七きみのれともみ
わき給いで(同玉葛)廿おろくのこへたるめよふとゝもえわりぬかりけり(同
幻)廿それともみこりれぬまでふりおつる御かみたの

身がそり(空穂 嵯峨の院)八十こが子の身がそりよ我こそよかめとふしまろび給ふ
○身のかそり(源うき舟)六十とのる人もそよめのやうよのあらせみかまのかそり

ぞといひつゝあやしきけをのみまらすれば夜行をたよせぬよとよろこぶ(同
蜻蛉)六さうりよきこいめさんと御身のりひりよ出たてさせ給へる御使かり

補みりのやうと(枕)廿六をさめみりのやうと(兼輔集)井でといふみりのやうと
よもたせて

みりそみづ(實方集)みりの水のつらよるてかぐむるよある藏人のものおもひがほ
よてるさるりなといへ(古)下東宮稚院よてさくらの花のみりの水よちりてかぐ
れけるをみてよめる

○みりその池(齋宮女御集)宮の御まへのやり水をみりその池とかんいふある
みりそを(伊勢物)九十をんなのつりうまつるをつねよみりそよてよさひこたりけ
り補大鏡序翁ふたりみかまよてあざこらふ

みりそ(御顔)拾哀「かびらるよともよちぎりよかひありて文珠のみりそあひみつ
るりか

補みりほ(欲見)万葉(記傳)卅六廿五(万)十九、若らたまの見りそよ君を見せひ
さよ(万)十七、長哥 山がらや見りそよからん 大井川ナリ

補みりへりなく(是則集)猿りひよなくおなよ行幸よ「秋山のかひよこりへりな
く聲をよふりくきよて袖ぞぬれぬ(興風集)

見りへる(源)とか菜上ノ猫のいたくなけバみりへり給へるおもちもてかよと
いとおいらりよて(同紅葉賀)廿二りそりのえからせ繪がきたるをさよかくしてみ
かへりさるまよ云々

補見りへ(宇治拾)廿七そやく狐みりへりよてさきよそりゆく

みりど(古)上春仁和のみりどのみこよおそよまよける時よ云々(源神)十御門のこた
りどころかくたちこみたり馬車(同すま)四十もろこよもわがまよとよも(同
あらし)九人のみかどよも夢を信よて國をたよくるたぐひおろく侍りけるを(同
あ合)二十人のみりどよもわがくよもありがたささえのよとをひろめ(續紀)廿五、
十六

朝廷

みりさのきみ(源 若菜)下ノかゝこきとりどのきみも位をさり給ひぬるよ

補みりり御符 (續古)雜中光明峯寺入道「よものうみむりよりへるおまの上よ

まま人いまやみりりまつらん。万葉あい

とりさ(源 さかき)五十とかりのみりたよこそ御こゝろよせ侍めりしを**補**御方ミカ

記傳三十一
十二丁

補身かたむ(源 常夏)七さりとていとさりく身りためてふどろのたらしよと

とりのこ(江次第)五ノ新年祭神祇官牽御巫着西廳(うつろ 藏開)下ノとりのこ

まひもて、御神ノ子ナリ今ミコト云(式祈年祭)御巫乃稱辞竟奉

みぐく(源 若紫)廿いとゞ玉のうてあまみぐきつらひ(同 花の宴)十あたらしうつ

くり給へる殿を宮たちの御もぎの日みぐきつらされたり(同 上のあ)上七さいの

上の御もてなしよとが、れて人のおもへるさまおまかたるよあらぬかりけり

(榮 花山)二堀川どのをいとつくりみぐき給ひて内裏のやうよつくりあして

(源 あふひ)三十二條院のうたゞらひみぐきて(拾 冬)「冬此よの池のて

りのさやけさひ月の光のまがくなりけり(源 初音)初庭よりとめみどころおるく

みぐきまゝ給へる御りたがたの有さま**補**榮ミカ枝五とぐろめつけおま心のせり

よ我身のけさうをしみぐくもあり是の化粧するを今も拾神樂「みぐきけるこゝ

ろもしるかゞと山くもりなき代よあふがたのしき(新古)冬俊成「雪ふれば嶺のま

さりきうづもれて月よみぐける天のかぐ山

みぐくれ水隠新古戀五よみ「あふことこのあみの下草みぐくれておづこゝろをく

ねこそかりるれ(六帖)上「ねまたてよよるわおてふうきがもの我みぐくれよ飛

もきなゝん(同)三「みくまのうらの松をら水ぐくれてねひひとつよやおひそ

るらん(同)五上「まこもかるおるのがそらの水ぐくれてこひこし妹がひもと

くあれ(和泉式部集)上「山かけよみぐくれおふる山くさのやまをよ人をおもふ

こゝろ(古)戀二友則「川のせよなびく玉ものみぐくれて人よあらぬ戀もるるりか

(續後拾)戀二慈鎮「こが戀のなよそりえのあいのねのみぐくれてのみとしをふるり

な**補**貫之集「山陰よつくる山田のみぐくれてほよいでぬ戀のくるしかりけり此

新勅よ躬 ことさ田のみぐくれて○戀よ身をやくたさん(後拾)春下良暹「みぐくれてをど

く蛙のもろこゑよささぎぞわたる井手のうきくさ

みぐくれて水身カケタルモタルモ○俊頼ノ玉クシノハニミガクレテヨメルヲ基俊ノ難シタル

余材抄戀二よ見ゆ○伊勢よくたりて侍りける比顯季卿のもとよ遣しける「どへ

がいな玉くしの葉まみぐくれてもぎの草ぐきめぢからむとも○信友按みがくれて
 の身隠れて也コハ俊頼卿齋宮内侍相具シテ伊勢ニ下リテアルホドノ哥也延喜式
 月次祭祝詞ニ大中臣太玉串爾隱侍天云々稱申事乎、神嘗祭ニモ大中臣太玉串爾隱
 侍天云々トアル詞ヲオモヒヨリテ興シテヨミ玉ヘル也補散木「ゆきふればあを
 さの山もまがくれてときその名をやけさのおとさん月清上「ふりきえはおもふ
 こゝろのみがくれてかよふさりの鳩の下みち續千戀一「えぞいらぬまほの下
 道みぐくれてかよふ心のありやなやと同法皇御製「池水のそこの玉ものみが
 れてあびくこゝろをたれまよせらん

身がくれて順集八判。判詞されども上のくさいもとの草よてあゆのかうのみそへ
 たれば人まかくれん人の身のみかくれておもてあらせせるこゝちをんしける

補見がくれ著聞十五、ちりまさしかりて見がくれくゆくま

とりく源玉葛八いとさきりたもありともわれのみりくしてもたらんと源松

風五廿文のひろをりあがらあれど女ぎとみ給そぬやうををせめてみかくし給ふ

御まどりこそわづらましけれとて同六十りけりまし給へる文どもの心をさ
 なくておのづから落ちる折あるを御方の人のほのくしけるもありけれど何うと

かくこそとたれまも聞えんまろくしつゝあるをるべし

みりま木御薪年中行事哥合「もろしきのものつりさのみりま木またみのけふ
 りもまぎまひまけり○みりま木と申の百官ことくくま木を奉るを宮内の司
 まをさめらるゝなり

補とけ續後撰戀三行能「岩をくぐりかけしけるすぐのねのあぐや
 袖をくくしてゝん同兼直「谷川のみかけまをける山菅のやまをそをのぬる
 る比りあ

補とらさ續古夏祐盛法師「さみたれまみりさまさりてうきぬればさしてぞとたる
 さのふかまゝ玉葉戀一國道「川浪の岸まおよびて五月雨のみりさまふねのさをぞ
 みどかき

みりさの山後兼輔宰相中將より中納言まなりて又のどりのり弓のかへりたちの
 あるままよりてこれかれ思ひをのぶるついてまふるさとのみりさの山のとを
 けれど聲のむりうのうとからぬりな○大將中將を三笠山といふなり八雲御抄大
 將中少將の異名云々新古戀一藤原「あつら雲のみねまもあさかよふらんおあつ
 人かよふときつりましける義孝「あつら雲のみねまもあさかよふらんおあつ

とかさの山のふもとを(右京大夫集)同大臣の大將までよろこび申給へりいき布
 ひゆゝくみえりくバ「いとゞく咲をふ花の梢をみりさの山にえたをつらね
 て(拾)賀雑おなト少將義孝かよひ侍りける所は兵部卿致平のみこまかりて少將のき
 とおそいたりといせ侍りけるをのち聞てかのとこれもどまつりいける「あ
 りしくもどがぬれ衣をきたるりな三笠の山を人よかられて(補)拾玉五定家侍従少
 將よかりぬとさして悦いふべりりてをまたいそでこの雪を便まで申やり「みり
 さ山さりゆく君がとちよ又花咲をふるけさの白雪(散木)五位して殿上おりて侍り
 ける比家道君のもとよりつれづれいかゞなど訪て侍りけるよ少將などのきさる
 事をおもひ出てつりせりける「三笠山さしをなれよあしたより泪の雨にぬれぬ
 日ぞあさかへ「みりさやま立をかれよそのかとの袂にこれもさこそぬれり
 (蜻蛉日記)下さねりたの兵衛佐よあそすべるとき給ひて少將よおそりけるほど
 の事あるべ「かゝる木の森たよけくきくものをかとりさるさの山のりひなさ
 るへ「りり木のもみりさの山も夏なればあやな人のいらなく(續拾)春雑
 中將を望申て年久しく成よけるよ五月雨の頃人のもとまつりせりける侍従「いり
 ませんごが身ふりゆくさとなれよ頼む三笠の山ぞりひあき(月詣)下雑民部卿成範中

將の時よりまのかみまで侍りけるよつりせりける清和院「みりさ山峯よりいで
 てくまもあきありのうらをてらを月け(同)戀下物申ける女の兵衛佐なりける人
 よかゝらひつきぬときつりいける參議「かゝる木のもりのかみのたゝら
 らみりさの山をさしをあらん〇瀆臣云兵衛佐を柏木大中少將を三笠山と異名
 する事の後撰拾遺の歌よとまれるよ顯昭法橋契沖阿闍梨をどくせりいそれ
 りりこのみりさ山の通親公時よ參議左中將よおそせり故よかくよまれたるなり
 〇多武峯少將物語よ少將をみりさ山とよめる歌三首あり(續拾)秋雑少將よ侍ける比
 よみ侍ける藤原隆博朝臣「いくとせりかさしきぬらんみりさ山おそり麓の秋のもみぢ
 葉(同)戀大將よ侍ける比文遣りけるひとのちらをかと申たりける返事よ万里小路
 「三りさ山さしももらさぬことのもあたまも露のかゝるべきり(同)上雑中將よ
 て年久しくあづみ侍けるころよみ侍ける中納言「さしもあどあとあるとちよまよ
 くらん三りさの山に名さへかそらで教良
 (補)みりさ(詞花)春道濟「ふるさとのみかきの柳をるくとたぐをめりけりあさみ
 とりそも(新古)賀經信「このへれみかきがそらの小松をらちよをば外のものどや
 りみる

みりきのうち(源さかき)卅おなトみかきのうちながらかせれることおろくかな

みりきもり(衛門式)八凡伊勢齋内親王初齋之時差門部二人衛士一人爲門衛(詞花)

戀上「みかきもり衛士のたぐ火のよるいもえひるいさえつゝものをこそおもへ能宣

(備中守仲實朝臣女子根合歌)俊頼「みりきもる衛士のたまえよおりたちて引いあ

やめのねももるなり

翹とよりの翹(續古)冬「と鷹のとより此翹身よそへておろゆき拂ふうたれ

みかりバ

とよの佛(夫)十八後京極「一とせのそりなき夢いさめぬらんみよればとけのかねれひ

びきよ(新六)五衣笠内大臣「いろふり死のりれ衣のすみぞめいみよのほとけのかたみよ

ぞ死る

みよの師(夫)十八俊頼「みよのの御名とあへつるあるよいつみもやこよひのこら

ざるらん

みよの野(瀨松)三初よの中のふるきためよ吉野の山と名よなぐれたるよりも猶

おくあるみよのといふところかりければ(同)卅一もろこよよとたりたるひとり

よいづこよあるとさづねさせ給へば吉野のあなたよよよのといふ所は堂たてゝ

そこよなんこもり給ひぬと申せば(同)十一「そむきていよの山よあとさ

えてうき世をミトとおもひいものをとてなんうちあけき給へる(同)中納言「きみ

すまをわれもよのよあとたえてかそりも世よめくらざらま(同)野の奥のみ吉野

とありて哥いいた吉野とむありいかに愚案よ古今己来みよしのよしの

と數多あり扱いみよしの深吉野く深山深雪の深ある猶此外も例ある

みたい(源東)廿三かやまよとておほとのをりくらいつ御たいこあたよ參る(同)

末摘(同)廿みたいひそくやうのもろこよのものあれと(同)夕(夕霧)卅たれもくみた

いまるりかどして(榮楚王夢)六つゆ御たいもきこしめさせ(同)夕(夕霧)廿おほとおぶ

らかといそぎまるらせて御たいかごこなたよてまるらせぬ

とたりよ(六帖)三(後)雜一「白川の瀧のいとみまほしけれさみたりよ人のよせト

ものをや

みたりがそく(源葵)廿世中の御ものがたりかどまめやりあるもまた例の御みた

りがそく事をも聞え給ひつゝ(同)繪合(同)十かやうの女をどけてみたりがそくあ

らそふよ(同)橋(橋姫)四十三りきさしたるやうよいとどりがわく(同)帯(帯木)卅から

びつごつものさもおきたればみたりがわくし中をこけ入給ひ(同)桐(桐つば)十云々

かどやうよみたりがそく心をさめざりけるほど御らんトゆるをべ

みたりかく病(源 若菜)下ノもるの比はひより例のこづらひ侍るみざりかく病といふものところせくおこり煩ひ侍りてかく病かの部補うつろ樓の上上ノ上みたりかくびやういたそり侍るとて

みたり風(榮 花山)九内よりめいあれどみたり風をどさまとの御さそりとも申させ給ひつゝまゐらせ給えぬを(源 楨柱)卅俄よいとみざり風をかやまうきを補(蜻蛉日記)下またうきまけのものとみたり風おこりておんきこえうやうまのえま

みたり胸(とりうへちや)二みたり胸いとふかくまおこりて侍をどかれバとていでせなりぬるがつかうこびうきま

みたりこゝち(源 溲標)卅みたりこゝちのいとかくかざりある折しも云々うせ給ひまけり(狭)二上けさの御ともまさふらひて風のおこり侍りけるまやみたりこゝち

例あらでえおきあがり侍らでとてけうちとけたるねくたれ姿よて出きたり(源 東や)四十みたりこゝちのいとくるう侍るを(同 夕顔)廿いとうたてみたりこゝち

ちのあう侍ればうつぶふして侍る也(同 若紫)廿みたりこゝちいとたへがたきものを(同 桐つは)十かきくらをみたり心ちまかん風ノオコ補(大和物)三みたりこ

こちのまたおこたりをてねど(源 藤のら葉)九みたりこゝちいとたへがさうて(瀧 松)下みたりこゝちこそいみとらたへがたけれ(空穂 樓の上)七上ノ二日頃みたりこ

こちのをやまう侍りけるまや(同 藏開)上、一みたりこゝちいとあう侍る

みたり足(源 稚本)卅御中道のほごみたり足こそいさからめと

みたり足のけ(うつろ 嗟峨の院)廿日比のみざりあいのけま侍らん更まふみたて

られ侍ら立動きも侍らぬを補同(國護)下御せうそくおほととのよりありまうで

こむざるをみたりあいのけあがりてとうさいいらせなん

みざる(源 柏木)廿病中みたれをがらいたいめん給もで(同 花の宴)三上達部

みなみざれて舞給へど夜よ入てのことよけぢめも見えせ(同 松風)十かゝる山がつ

の心をみたり給ふさりの御ちぎりこそありけめ(同 紅葉賀)廿ううさたをぐる

までなどさしもみたるらんと云々(同)廿おりたちてみたる人うべせこがま

まこともおほからんと(同)廿情なからぬをど打いらへてまことよみざれ給も

ぬを補山家下「吹みたる風まびくと見しをどの花をむすべる青柳のいと(新 續古)維上「おもふも過て哀まきこゆるハ萩の葉みたる秋のゆふ風(新拾)春下

御製「ふきみたる花のちら雪かきくれてあらう迷ふ春の山みち(万代)夏よみ人

「久方の月のかつらのうりひ舟河風をやりたなをみたるな(同)「瀧河ややが、
けり小夜更てくごさう舟の手繩みごまな(同)「春風の吹なみたりをこぎもこが
かづらよせてふ青柳のいと(金葉)秋公實「あたりの、つゆ吹みたる秋風はなびきも
あへぬをみなへりりか(伊勢物)八十一「ぬきみたる人こそあるら、白玉のまなくも
ちるり袖のせまきよ

みたれ(源夕霧)六十。落葉ななり、るをたれよそへてわりなき御心なんいみとら

つらき(同 楨柱)四大將の名よたてるまめ人のと、ころいさ、りみたれさるふるま

ひかくて(同)七源玉ノいとくうおぞしたるさまの心ぐるしければおぞすさまよ

みたれ給もぞ(同 幻)十宮たちをともおとさびさせさまひまことよ動きかかるべき

御ありさまよ見奉りなさせ給もんまでいみたれなく侍らんこそ云々(榮駒くらへ)

十さまよをりしみたれ給ふ(源 帶木)卅大りたのけしき人のけしひもけさやり

よけたりくみたれたる所まよらぞ云々あつさまみたれたまへる御ありさまを云々

(同 行幸)八なきみとらひとみか打みたれたまひぬ(同 夕顔)十せんざいのいろく

みたれたるを(同 桐つは)初もろこよもかゝることのおこりよこそ世もみたれあ

しりりけれとやうくあめの忘たよもあぢきかうひとのもてなやみくさまありて

(同 葵)十かゝる御物おもひのみたれよ御心ちなほ例からぞおぞさるれば(古)戀一

八「あそれでふことたよあくは何をりのひのみたれのつらねをよせん(榮 月

の宴)四十をりし御狩さうぞくとよまてさもをりかりしな舟岡よてみたれ

よもふれ給ひこそいみときみものなりし(補)万九ノ「ごりれてもまたもあふ

べくおもえバ心みたれてこれこひめやも

みたれがそく(狭)四下うろがらもさやうよみたれがいろく心をさくるりさ

よかくて今二三年たよ過していみとからんはたよもをふりすて、世をそむき

かんとおぞしける

みたれまさり(源 蜻蛉)廿御こゝろもみたれまさり給へど

みざれうれへ(源 桐つは)廿みたれうれふることやあらん

みたれ言(源 楨柱)卅まめたちてさふらひ給へばえおぞすさまあるみたれどもう

ち出させ給もぞ

みたれ事(源 豆のな)上をさくさまよくおづりあらぬみたれどをめれど所がら

人がらなりけり

みたれたる扇(狭)二ノ上いろく、の紅葉散り、りつ、いたくぬれ給へばみたれた

る扇のかくれかきをさしかくして

補 みたれあし（うつは 櫻の上）下ノ二 くらう人みたれあしうでうれせとべりみ 六十八

きよかづき給ふもののみむしのやうよてやむくめさまらん（新後拾）戀一、二品 法親王覺

助 一深き江よながれもやらぬみたれあしのうきふかからさてやくちあかん

○みたを（三代實錄）十七 我朝乃神國止畏憚利來禮留故實乎澆多之失比賜布奈（續

古）秋下 忠良 一行秋の露れりたみもとめとと草葉を風のふきみたをらん（源 権本）十

をのこはいとしも親の心をみたさきやあらん（拾玉）三 一何となく見る心こそむす

やるれやなぎのいとをみたを春風（新續古）春上 小宰相 一ぬきとめぬ玉りとぞみる春風

の露ふきみたを青柳のいと

みたらし川（新後拾）賀（堀百）匡房 かみ山のふもとをどむるみはらしのいとらつ

なみやよろづよのりぞイヅレノ社ニモ河アラハヨムベ （袖中抄） 一戀せととみたら

し川よせいみをそぎ神御前ノ川ヲ云也 御手洗川トカケリ

みたの御國（新古）釋教 俊成 一いまぞこれ入日をもてもおもひこしみたの國のゆふぐ

れのそら

みたやもり（後拾）夏 好忠 一みたやもりけふの五月よなりよけりいをけやさかへおい

もこそそれ田をもるものをみたやもりといふ也とぞ

みたまのふゆ（夫）十八歳 暮好忠 一いとまかみりひなき身さへいそぐりなみたまのふゆと

うべもいひけり

みたけさうト（仲文集） みたけさうトとて石山よこもりたる女房（源 白うは）

一廿みたけさうトよやあらんたゞ翁びさる聲よぬりつくぞきこゆる（榮 初花）十二月

よかりてとのゝおまへみたけしやうトんとめさせ給さんととるよ四五月よぞさ

らばまるらせ給ふべき猶秋山なんよくとべるかど人々申て御志やうトんのべさせ

給て（注）よ金峯山よまるらんととる人の千日の精進とあれと初花の巻よよれば百

日の精進とるかるべし（定頼集） みたけさうトてつれとよおぞされけるよ

みたえ（水絶）重之集） 八 一みたえせぬ井手の山吹かけみればいろのふりさもまさら

ざりけり（六帖）貫之 一天河みたえもせあなかさゞぎれ橋もとたさでたゞとたりか

ん（好忠集）五月 終 一をやま田此みたえせしより天よまを岩間の神をねがぬ日にかし

補 （公任卿集）連哥 一白川のかがれてけふをわそれめや（御車より） みたえてあさき

瀬といなるとも

みたてあし（夫）四源 仲正 一志不風よをトまじさくら花咲てなみのみたてもなくてちり

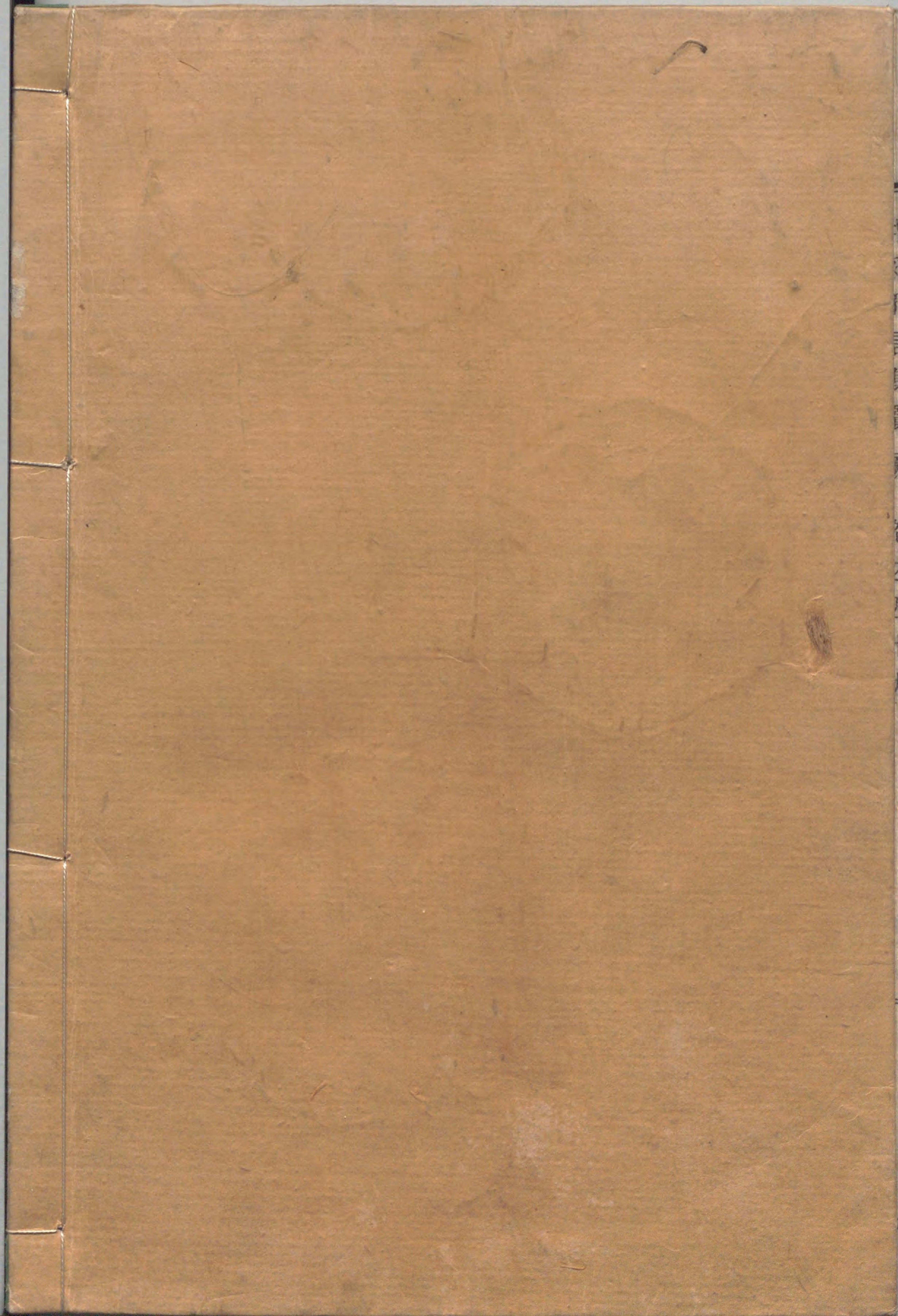
ぬる(源 帚木)十よろづよみたてかくものけあきほどをみまぐして(同 朝顔)十あそ
なれ衣のあまりめかれてみたてかくおせさるゝや

みたてまつる(源 タウは)十うちみ奉る人たよ

みれんのもの(宇治拾)八いりなる事ぞ公卿あひて禮節して車をおさへたれば御前
の隨身皆おりたるよ未練のものをあらめ以長おりざりつるいとおほせらる

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

増補雅言集覽卷之四十九 終



增補雅言集覽

六

813.6-1619g-Nn



1200600630328

集約濟 8冊

813.6

I 619g

Nn J

